
現し世の華

眞乃鑄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現し世の華

【Nコード】

N 7 6 6 4 A

【作者名】

眞乃鑄

【あらすじ】

天変地異により崩壊しかけた世界。その大地を繋ぎとめ生き残ったのは、妖の血を引く陰陽師“千”^{チエン}の一族だった。そして二度目の平安の世を迎えた日本。一族の末裔である“抱月”^{ほうげつ}は、ある日赤い瞳の少女を助け出す。それが、すべての始まりだった。

序章（前書き）

この小説は、原作（原案）を貴水玲様に提供していただき、それを元に小説化したものです。

コラボレーションという形ですが、指摘などはすべて私が受け付けます。貴水様に迷惑となるような行為はなさらないようお願いいたします。

序章

大きな地響きと共に、その日世界は倒れた。

ビルは崩れ、鉄の塊を地面に悠々と伸ばしている。

かつての街が、川が、木が、人間が皆持っていた光が一晩で消え失せた。

ある地域は海に沈み、ある地域は火山の噴火で溶岩の中に埋まった。

そして絶望の夜が終わりまた太陽が戻ってきても、闇が消え去ることはなかった。

その事実を証明するかのように、瓦礫の隅に死体が転がっている。死体が手に握っているのは、一枚の写真。

にこりと笑った、女の子の写真。

灰だらけになってしまった今では、それが誰なのか見当もつかない。

それが、人類の歴史に一度停止ボタンを押された日のこと。

第一話 廃墟と彼岸花

廃墟の街に、一匹の蝶々がふらふらと飛んで行ってしまった。

そこは周りを壁に囲われてはいるが、もつと高いビルの残骸がこちらを無言でのぞいている。

それだけでもう、中がどういう状態であるのかが容易に理解できた。大きな灰色に彩られたその街には、昔から出入りを禁じられている。「もうこんなところまで来てしまったか」

抱月は不快そうな声でつぶやく。

幼い頃は都から遙か彼方に見えたその「街」が、今目の前にある。今でも、見ていると重く剣呑な気分が襲われるくらいだ。

言われなくても、こんなところに入ってやろうなどという好奇心なんて湧くものか。金を払われても来たくない。

だがふらふらと辺りを散策しているうちに、いつの間にか自分の前にこの街が姿を現したのだった。

そこで広く続く荒れた大地を振り返る。

すると、帰ろうと決意して歩きだした抱月の視界の隅に、一瞬自然なものがつつた。

右手に広がる目も眩むような紅い花畑。見るとその中で、二本足で立つ犬のような頭をした獣が人を襲っている。

「やはり獣人か」

ためらうことなく刀を抜き走り出した。獣人と彼の距離は約三十メートル。

逃げ回るだけの人間を、獣人は鋭い爪で引き裂こうと追い回している。人間の方はもはや弱りきっていて、攻撃をかわすので精一杯のようだ。

このままでは間に合わないと判断した彼は、懷から一枚の紙を取り出した。

鳥の形をしたその紙を勢いよく放ると、吸い込まれるように獣人へ

と飛んでいく。

切り裂いたのは両目。

獣人が奇声を発し、鋭い爪が生えた手で顔を覆う。

溢れ出した泥のような血がその隙間から漏れ、彼岸花にぼたりぼたりと重たい色を乗せた。

その間に彼は背後へ回りこんで、首の付け根に刀を突き立てる。

獣人は、ぐうと一声鳴くと花畑の中に倒れ込んだ。直後、その体は酸が溶けるような音を立てて消え失せる。

そして間もなく、頭があった辺りから小さな一輪の花が咲いた。

真紅の彼岸花。

死ぬとこの姿になることから、獣人の生まれ変わりとも言われている。

彼岸花が咲き乱れるこの辺りは、いわば墓地にもあたるのだろう。

それをまるで取り付かれたように一心に見届けた後、抱月は思い出したように辺りを見渡した。

獣人に氣をとられ、すっかり忘れていた。先ほどまで襲われて逃げ回っていた者の事を。

「大丈夫か？」

近くで仰向けになって倒れている娘を見つける。

抱月は刀を鞘に納めると、側に腰をおろして顔を覗き込んだ。年の頃はおよそ十五、六だろうか。

呼びかけに気付いたのか、彼女はうつすらと目を開けた。

花と同じ色の赤が、抱月の目をじっと見つめてきた。それは、獣人であることを示す色だ。

（この娘も——目の色以外は、人間とほとんど変わらないのに）
そうとなれば、殺さなくてはならない。

獣人にも色々な種類のものがある。

先ほどのような獣に近い形のものから、人間の姿に限りなく近いものまで。

この獣人は後者の方でおまけにまだ子どもだが、成長すればその

うち間違いないく都を襲ってくるようになるだろう。今は荒れた大地を苦勞して復興させている最中だ。こちらとしては少しでも敵を減らしたいところ。

素早く鞘に手をかざす。しかし。

まるで相談を持ちかけるように、抱月は純白に染まっている刀の鞘を見つめた。そして首筋をかきながら考え込む。

「獣人が、獣人を襲っていたというのか」

視線を戻すと、娘は安心したように抱月の膝に頭を預けて寝息をたてていた。

どうやら酷く疲労しているらしく、目の下にはうつすらと隈が出来ている。

しかも、少女の髪が思ったよりばさばさなことに気付く。

なんだかそれらすべてが哀れに思えて、無意識のうちに彼女の頭を撫でていた。何度かそうしてやると、いくらか髪の毛も整ってきた。

ふと思いついて、後頭部で一つに結っていた自分の長い黒髪をほどく。その白い髪結いの紐を使い、少女の肩まである髪をそつと一つに束ねた。

まるで巫女のように安らかな顔をしている。

だがそれでもまだ砂まみれなので、今すぐこの娘を頭から池に浸かせ、ごしごしと洗ってやりたくなる衝動に駆られた。

「さて、どうしようか」

日が沈めば、この辺りにももつと沢山の獣人が徘徊します。

気を失っているこの小さな獣人を放っておけば、どうなるのかは解りきっていた。

しかし都へ連れ帰れば、一体どんなことになるだろう。

そついう後ろめたい気持ちはあったが、抱月は少女を軽々と抱きかかえると、意を決したように歩き出した。

第一話 廃墟と彼岸花（後書き）

久しぶりの連載モノです。

上手く書き上げられるか不安ですが、どうぞお付き合い願います

第二話 桜夜

今までに、これほどの緊張感を味わったことなどあるだろうか。

日が完全に沈むまで、抱月の体がようやく隠れる程度の茂みにずつと身を潜めていた。門番が交代するわずかな隙を突いて、なんとか南門から都の中へ入る事に成功した。

生まれてからずっと住んでいる陰陽師の都なのに、どうしてこんなにコソコソしなければ……一瞬、自分が抱えている少女の存在を忘れたりもした。

依然この小さな獣人が目を覚ます気配は全く感じられない。まさか死んでいるのではと心配になったが、もしそうだとすればあの赤い彼岸花になるはず。

しかし彼女が衰弱しているのは確かだ。一刻も早く自宅に戻らねばならない。

「抱月！」

聞きなれた声を耳にしまったのは、まさに歩き出そうとした瞬間だった。

「それ何だ!？」

そしてお決まりのわざとらしいいわめき声。

振り向くと、懐中電灯で顔を照らされた。

眉根を寄せて手で振り払うしぐさを見ると、その女は仕方無さそうに明かりを消す。

抱月はため息をつく、腕の中の少女を抱え直して近づく。

「桜夜、頼むから静かにしてくれ」

「ふーん、これはまた可愛い獣人をお連れのようなだね」

またもや懐中電灯の明かりをつけ、今度は少女の顔を照らす。腰に手を当てながら妙にニヤリと笑いつつ、桜夜は少女をまじまじと眺めた。

「ところでお前、また白張を着てるのか。それ雑用係の着物だろ」

青い衣を着ている抱月と並ぶと、やたらに目立つ白の狩衣。しかも偉そうに烏帽子なんかかぶっている。

「お前の言ってるのは大昔の話だろ。今は何を着ようが自由だ。しかもあたしは白が好きなの！ そんなことよりどうすんの、この子」「それは……今考えてるところだけど」

「へえ、そうかい。まあ何をするつもりか知らないけど——秘密にしておいてあげてもいいよ」

勝ち誇ったように堂々としたこの口調。その辺の男と口げんかしたって、ほとんど負けることはない。

桜の咲く美しい夜に生まれかたら“さくや”。

どうか、この桜の様に美しく華やかに育ってほしい。

そんな想いを込めて名前をつけた彼女の両親は、当の本人がこんな男勝りになるなんて予想もしなかったことだろう。

「来いよ、家にかくまってやる」

「信じていいのか？」

「まかせとけて」

付いて来いというようにあごで促すと、桜夜は意気揚々と歩き出した。

抱月の自宅は、都の中央に位置する陰陽寮のすぐ裏にある。

つまり陰陽寮の四方を護る警備係に、どうしても見られてしまう可能性がある。

もし自分一人だったら、もっと大変なことになっていただろう。それを考えると、調度桜夜と会えたのは好都合だったのかもしれない。しかしこの女、興味を持ったことには何でも手を出そうとする。

「わかってるよ。またあたしが興味本位で手を出そうとしてる、とか思ってるんだろ」

「他に理由があるのか」

「確かに半分くらいはそうだ。それは認める。でも今の陰陽師にとつて、都を襲ってくる獣人を狩るのは大切な仕事。あいつらはあたら陰陽師を殺そうとしているからな。その獣人を、お前は大事そ

うに拾ってきた。何かよほどの理由があるんだろ」

抱月は一瞬返答に戸惑った。

この少女を拾った事に、よほどの理由なんてあっただろうか。
いや、よほどのことでもないのかもしれない。それはよくわからない。

ただ、あの時。

「疑問に思ってたんだ。この子は同じ種族であるはずの獣人に襲われていた。俺達は、少なくとも理由なしで他人を殺そうとしたりはしないだろう。どうして獣人は、同じ種族同士殺しあうのだろうかと思っただけ」

「へえ、相変わらず綺麗事言うね。あたしから言わせてもらえば、新生種なんてただの能無し。獣と変わらないね。自分が生きるために他の奴らを殺してるんだろ」

ちらりと獣人の少女を横目で見ると、桜夜はわざとらしく鼻をフンと鳴らしてそっぽを向いた。

「いや、別に意識して綺麗事を言っただけじゃないんだ。本当に何気なく思ったから……」

「言っとくけど、あたし新生種は嫌いだから」

彼女の言う“新生種”とは、もちろん獣人のこと。

世界に天変地異が起きてから数百年。

生き残った陰陽師の先祖達は、今日に至るまで必死になって文明を築き上げてきた。

一方の新生種は、二度目の平安の世が始まるとほぼ同時にこの世界へ姿を現した。

彼らはいつのころからか、陰陽師を襲い、都に侵入しようとするようになった。新生種は、人間とほぼ同じ姿をして人間を襲う生命体。現在では、調査係によって少しずつその生態について研究が進められている。しかしまだまだ未知なる存在だ。

「桜夜。その新生種って呼び方、差別してるみたいで嫌いだって言っただけじゃないか。俺の前で使わないでほしいんだけど」

「お前さつき白張がどうの言ったくせに。それは差別じゃないんですかあ」

この上なく馬鹿にした口調で切り返された。

何を考えているのなんてさっぱりわからない。さっきまで楽しそうに笑っていたくせに、この娘を拾ってきた理由が気に食わないのか、今度は怒り出してしまっなんて。

仕方がない。

確かになんとなく感じが悪いが、こちらが怒って言い返せば大口論勃発だ。黙ったまま、ひたすら彼女のあとを付いていくことにした。それほど広くはないが、この都は少し特殊な構造になっている。

各家の周りを取り囲んでいる塀が、碁盤の目のように規則正しく都中に張り巡らされているのだ。

侵入してきた者を迷わせて、役所となっている陰陽寮へ簡単にたどり着けないようにするためである。

遙か昔、天変地異が起きる前に、自分達の先祖である“古代種”が考えたした仕組み。

そして現在、都は更なる拡大と整備のため工事中だ。

「着いたぜ。入りな」

彼女がようやく振り向く。いつの間にか家に到着していたらしい。

ここは陰陽寮から見えて西側。しかも城壁と西門のすぐ傍。

そう、彼女の家はこの都の西側を司る陰陽師だ。いざという時は敵の侵入をここで防ぐため、戦いの指揮をとることになっている。

「今日もカツコイイだろ、この白虎達」

家の門の両脇に対を成して置かれている、台座に乗った白虎の銅像。

阿吽の口をしているこの二匹は、いつ来てもどっしりと構えつつ、誇らしげにこの小さな屋敷を護っている。

「早くその娘を休ませてやろう」

まるで身内の事を心配するような顔をした桜夜。

あまりの態度の変わりぶりに戸惑うと、彼女は先ほどのように怒っ

た顔をした。

「じれったいな、よこせ」

抱月から少女を奪い取って、少し恥ずかしそうにつんとした声で言う。

「あたしはこの娘を獣人じゃなくて、女の子としてみてるんだ。同性として、ほっとくわけにはいかないだろ？　ただそれだけだ」

すると、まるでそれに反応するかのようにすっと瞼が開き、赤い瞳が桜夜を見つめた。少女は確かめるように何度か瞬きをして、不思議そうな顔をしている。

「えっと……た、立てる？」

桜夜は苦笑いしながら声をかける。

「桜夜！」

抱月が叫んだのは、それとほぼ同時だった。

ふいに少女の左腕が動き、手の先の鋭い爪が桜夜の喉元へ走る。息を吸う暇さえもなかった。

抱月の脳裏に焼きついた、コマ割の世界。

桜夜へ手を伸ばし、足を踏み出し、突き飛ばし、少女の腕を掴み——
気付くと倒れていて、自分の腕の中には再び獣人の少女が納まっていた。

「抱月……！」

ほぼ悲鳴に近い桜夜の声。

「大丈夫だ。心配、ない」

少女を上に乗せたままゆっくり起き上がり、顔にかかった髪の毛を除けた。

「おい、血が出てる！」

指をさされて初めて気付いた。腹部の着物が縦に裂けている。

「そんなに深い傷じゃない。桜夜だってこの程度の傷を負ったことくらいあるだろう」

「お前、少しは痛そうにしろよ」

「我慢が大事だろ、何事も」

そこでふと視線を感じ、抱月は膝の上の少女を見た。

「そうだ、どこかぶついたりしなかったか？」

一応声をかけるが、果たして日本語が通じているのかはわからない。ぼんやりと、だが視線をそらすことなくじっと見つめてくる少女。なんだかこっちの居心地が悪くなってしまうくらいだ。

だがその視線が抱月の腹部へ落ちた瞬間、弾かれたように体がビクつき、虚ろだった赤い瞳が思い切り見開かれた。

「どうしたんだ？」

ほんのわずかに少女の唇が動き、何かつぶやきながら後ずさる。

やがて顔が苦痛にゆがみ、しまいには息をしゃくりあげ出す。

目からは涙の線が何本も流れ落ちた。

ゆっくりと両手で頭を覆い、間もなくその小さな手が、肩が、白い足が震えだす。

そこで自分の手から妙な匂いを感じたらしい。

“恐怖”に頭からつま先まで飲み込まれた少女が、抱月の血で赤く染まった自分の両手を捉えた。

刹那、形容しがたい甲高い叫び声が聞こえてきた。

それが彼女の口から上げられているというのに気付くのは、しばらく時間がかかったように思われる。動物の鳴き声のようでもあったからだ。

この世のすべてを否定し、まるで絶望するかのような赤い悲鳴。それは空高く、どこまでも伸びていった。

第二話 桜夜（後書き）

今回は少し長くなってしまいました。
その分テンポを良くしたつもりです。が、全然良くないじゃん！と
思ったらどうぞご指摘ください。

第三話 野鳥が舞う夜に

仰いだ月夜が眩しかった。独り占めするのには、もったいないくらいだ。

通りの先にある宴会所からは、陽気な三味線の音が聞こえてくる。あれから、少女が落ち着きを取り戻すのを待って、家の中へと運び込んだ。しかし抱月は、腹に包帯を巻かれたかと思うと、そのまま外に放り出されてしまったのだ。

「はあ……一体何してるんだか」

もう三十分はこうして三味線の音を聞きっぱなしだ。

獣人の少女の姿が、ぼんやりと思い出された。

白い狩衣の桜夜と並ぶと、少女がまどつている着物は単なるぼろきれにしか見えなかった。彼女が着ていたのは、おそらく人間から盗み取ったもの。

狩に出かけて帰ってこなかった同胞は、本当に数え切れないほどいるのだ。

自分でちぎったのだろうか、袖は肩までしかなかった。丈はなんとか膝まであったが、袴も何も穿いていない状態だった。

今まで彼女が、どんな生活を送ってきたのかを知る由はない。

しかし、これから少しでも良い思いをさせてあげられたら。少しでも喜ばせてあげられたら。

何をすれば喜んでくれるのだろうか。何をすれば笑ってくれるのだろうか。

そもそも、獣人達は笑うということを知っているのだろうか。

色々と考えが頭の中を巡った。そこで、ふとある事に気が付いた。

「名前、なんだろう」

獣人、新生種、少女。それを呼び名にしてしまっていた。

これからどうなるのかはわからない。もし誰かに見つかったら、あの娘は殺されてしまうのかもしれない。

それに自分が何をどうしたいのか、良くわかってすらいない。

けれど、せめて名前をつけてあげるくらいなら。

首筋を掻きながら、再び空を見上げた。星と雲と、丸い月が無言で浮かんでいる。

彼らは何も語らない。しかしこうしてただ観ているだけで、沢山の事を教えてくれる。

美しいと感じる心。穏やかな気持ち。

月を横切って、遠くへと野鳥が一羽飛んで行く。その翼でどこへ行くのだろう。相変わらずの三味線の音が、まるで野鳥へ捧げられているようにも思えてきた。

「翼、いや、羽……音……そうだな」

音のように自由に、鳥のように遠くへ。

「おとは……音羽」

確かめるように、そつと口にしてみた。

途端に嬉しくなって、抱月は家の中へと駆け込んだ。今すぐ伝えたい。

言葉はわからなくても、自分がそう呼んであげることによって、気付けてあげたい。

「音羽！」

障子を勢い良くあけて、はっきりと言った。

桜夜の驚いた顔。その隣に、着物を着せられている途中の少女の姿があった。

「おい、呼ぶまで入ってくるなって」

「決めたんだ。音羽だ！」

傍に寄って視線を同じ高さになると、少女の肩に手を置いた。

「音羽。そう呼んでもいいか？ 君の名だ」

少女は首をかしげた。だが、笑っている抱月につられたのだろう。ぎこちなく、口の両端を緩ませた。

「見たか桜夜、今笑ったぞ」

「はいはい。じゃ、音羽の着付けを続けさせてもらってもいいかい、

旦那」

「あ……」

桜夜は音羽を風呂に入れていたらしい。顔の汚れが消えていた。ほのかに、金木犀の香りがする。

そして音羽がまだ小袖と袴しか身に着けていないのを見て、なんだか罰が悪くなる。

「はい、わかったら出てってね」

* * *

「本日もお疲れ様でした。明日の予定を確認しに参りました」

屏風の向こうへ、機嫌を損ねないよう限りなく気を使った声を発した。

「そんなに怖がらなくてもいいのに。俺のこと嫌いなのか？」

「いえ、そ、そんな。とんでもありません」

「大丈夫、今日は機嫌が良いんだ」

直後屏風から、紫の衣を着た男がするりと現れた。

彼の手には青銀に光る短剣。刃を出したり引つ込めたりしつつ、ニコニコしている。そのさわやかな顔がこちらを向いた。

「知ってる？ これ、折りたたみ式の“ないふ”っていうんだ」

「はあ……私の短剣は折りたたんだり出来ません。そういったものは初めて見ました」

「そう！ じゃ、是非どうぞ。楽しいよ」

畳についている右手の傍で、ストンと歯切れの良い音がした。

見ると先ほどまで男の手の中にあつたはずの“ないふ”が、人差し指の数ミリ手前に刺さっている。

「そつ、蒼雪様！」

驚きながら後退ると、彼はさらに楽しそうな笑い声を上げた。

「いやあごめんごめん、ほんの冗談だよ。お詫びにそれあげるから。さて、今日の仕事はこれで終わりかな。帰るとしよう」

「では明日の予定を申し上げ」

するといきなり、顔面の前に手のひらを突きつけられた。

この男に言葉を制されると、口だけではなく体そのものが緊張して動かなくなってしまう。

本当に不思議なことだ。このまま永遠に、自分の中で時間が止まってしまうのではないかという不安さえ覚える。

「どう、なされましたか」

やつとのことで口を開く。途端、すべての時間が戻ったかのように、頬に一筋冷たいものが通った。

「気のせいだと良いんだけど。君は何か妙な気配を感じなかったかい。西の方だ」

ちらりと見えた真剣な眼差し。月夜を思わせる青みがかった黒い瞳。その先に一体何が見えているのだろうか。

自分も一応“千”の一族ではある。だがこの男を超えるなどというのは、一生かかっても無理だろう。学問も、占いも、遠くの気配を感じることも。

どこことなくどこかしい気持ちになる。

もう少し、自分に才能があつたなら――だが、まだまだ勉強不足だ。仕方なく黙ったまま頭を振った。なんて情けない返事だろう。

その後、ゆっくりと彼の手が下ろされた。

「じゃあ気のせいかもしれないね」

「蒼雪様にわからないことが、私なんかにはわかるわけありません」下ろした手の向こうに、またいつもの彼の笑顔が戻っていた。

「君はもう少し自信を持つといいよ。俺の生徒なんだから。そうそう、明日は参考書に“五行大義”を使うから、忘れずに持って来るとだよ」

「承知しております。あ、先生。これから少しお時間ありますか。教えていただきたいことがあるんです」

「ごめん、今日は行くところがあるから」

少し残念そうにする彼を見て、慌てて頭を畳に付けた。

「無理な事をいってすみませんでした」

「いいよ、じゃまた明日」

蒼雪の後ろ姿を外まで行って見送った。陰陽寮を出た彼は、そのまま都の西の方へ姿を消した。やはり先ほどの気配が気になるのだろうか。

少しでも何かを感じ取ったら、動く。それが彼なりの陰陽師としての心構えなのだろう。日夜、都を守るために。

早く自分もそうになりたい。都のために、戦えるようになりたい。

「見つかったら怒られるかな。でも、ちょっとくらいならいいよね」
今ならまだ間に合う。

好奇心が勝ってしまった彼女は、消えた蒼雪の後を追って走り出した。

第三話 野鳥が舞う夜に（後書き）

やっと名前が出せました（^^・）
私もまだまだ試行錯誤中ですが、キャラクターと共に成長できたらいいなと思っています。

第四話 青い炎

蒼雪の後を追って、大通りから細い道へ曲がった瞬間。

背後に気配を感じる間もなく、誰かに右腕を取られそのまま引き寄せられた。

「亜矢。君の家はこつちじゃないだろう。どこへ行くつもりだい」
恐る恐る首を巡らせると、案の定そこには蒼雪の姿があった。

「申し訳……」

「そうだ。罰として、君にはちよつと用事を頼もう」

怒っているのか、それとも単なる戯れなのか。

微笑を浮かべる彼の顔からは、一切その言葉の意味するところを悟ることはできない。

「俺の弓、どこに保管してあるのか知ってるだろ。それを持っておいで」

「蒼雪様、何をなさるおつもりですか」

「知りたいかい」

そこではつとした。

彼の目が、いつになく楽しそうに見えたからだ。背中に一筋、冷たいものが走る。

昔、一度だけ獣人狩りに連れて行ってもらったことがあった。その時見上げた彼の横顔。瞳が狂おしいほどの喜びに満ち溢れていたのを思い出す。

「今から狩りを？」

自分の言葉がきちんと声になっているのか、それすらわからなかった。

なんだか遠のいて行く。何もかも、地面に立っていることさえも。

刹那頭に浮かんしたのは、頬を獣人の血でどす黒く染めた蒼雪の顔。それはだんだん、目の前の彼の顔と重なる。

戦慄を覚えた。血まみれの彼の笑顔に刺される自分の心臓。これ以

上はもう口を開いて何か言葉を発するのは無理だ。

「さあ、早く持っておいで」

静かでやわらかく、一つ一つの単語が雪のように耳へと降りてくる。決してせかすような口調ではない。

しかし亜矢は一種の焦りを感じた。そう、一秒でも速く――右手が離された瞬間、誰かに思い切り突き飛ばされたかのように走り出した。

後ろは決して振り向かなかった。化け物からでも逃げるような気持ちだったからだ。

喉はいつの間にかカラカラに渴いている。しかし走り続けた。いつまでも背中にとわりついて離れない、紅い恐怖から逃れるように。

* * *

「じゃあ行つて来るけど、本当に一人で大丈夫か」

そこで言わなければ良かったと、抱月は少し後悔した。

「おいおい、あたしってそんなに弱そうなのか。それとも、これ以上でしゃばるなって釘を刺したいのか。やっぱりお前も男尊女卑なんだな」

あからさまに頬を膨らました桜夜の顔。

彼女の完全に強気な態度で、後悔の気持ちは少しどころではなくなってきた。だが心配なものは心配なのだ。

「お前はただ南門へ行つて、戻り印を押してくるだけだろ。何でそんなに心配するんだよ」

「しかし、その間にもし音羽がまた暴走でもしたらどうするんだ。一人で止められるのか」

「だってあれは血を見たからびつくりしただけだろ。な、音羽」

だが桜夜の傍で腰をおろす音羽は、一体この人は何を喋っているのだろっ、という顔で首をかしげるだけだった。

「まったく厄介だよな、あの掟は。いや、最初からお前が判子を押して入ってきたら良かったんだよ」

「そんなこと言われても…… 忘れたものはしょうがないだろ」

掟として、狩に行くときに門で一度通過記録書に自分の判子を押すことになっている。

この都には東西南北、四つの門がある。だが都に帰って来たときは、出た時と同じ門から入らなければならない。

抱月は今日、南門から狩に出た。そのため音羽を連れて帰って来たときも、ついいつもの癖で南門から入ってきてしまった。しかし肝心の印を押し忘れたのだ。

「じゃあ、俺がいない間もし誰か来ても、頼むから喧嘩を吹っかけるのだけはやめてくれよ」

「わかってるよ。ほら、さっさと行ってこい。早くしないと門番もろとも上の奴に怒られるぞ。あたしが気付いてよかったな」

桜夜はいつも人を思いやるように笑う。たとえ自分が損をするとわかっていても、結局人のためになるのならそれでいいのだと言っていた。

今だって、ささいなことではあるが、こうして抱月が怒られるかもしれないという事を心配してくれている。

その度に抱月は、彼女が親友でよかったと心の底から安心できるのだ。

自分にとって桜夜は頼れる存在だ。桜夜は自分を頼ってくれているのかは良くわからないが、そうであろうと願いたい。

「本当に、気をつけるんだぞ」

この時わずかに抱いていた、そこはかとなく湧き上がる嫌な予感。抱月は無意識のうちに、それを無理矢理押し殺してしまっていた。自分の気にしすぎなのかもしれない、と。

外へ出ると、先ほどまではなかった雲が月を覆い始めていた。

* * *

肩に小さく重みが乗った。

何事かと思い振り向くと、肩には音羽の手が置かれていた。その手の先の爪は、鋭く伸びている。

「爪切ろうか。やすりで削った方がいいかな」

微笑みかけると、音羽はそれを真似ているつもりなのか口の端をゆるく吊り上げる。

そこで桜夜はピンと来る。これはもしかして。

「音羽、わかるか？ お、と、は。言ってみな。自分の名前だよ」

なんとか言葉を発してくれないかと期待を込めつつ、しばらく大げさに口を動かしてみよう。しかしそう上手く行くはずもなく、音羽は首をかしげるばかり。

「うーん、やっぱりだめなのかな。でも口の形も喉も古代種と一緒にだし、発音も普通にできると思うんだけど」

いつの間にか爪を切るのも忘れ、音羽を座らせそれに向かい合う。何でも良いから、とにかく言葉を教えなくなったのだ。

「じゃあそうだな。ほうげつ。ほ、う、げ、つ！」

もう何十回以上同じことの繰り返しだった。やはり言葉を話すまでの能力はないのだろうか。また首をかしげられるのかとあきらめかけた。

「ほ……れ、う？」

「今、喋った、よな。やった、喋った！ ほうげつ、だよ。お前を拾ってきた奴の名前だ」

「ほお、げつ」

本当に小さくて、頼りない声だった。しかし、確実に前に進んでいる。

「しかし、自分の名前よりも先に抱月の名前呼ぶなんて。あいつ喜ぶかな」

桜夜が笑うと、音羽も真似をして笑う。まるで妹が出来たような気分だった。

だが、そうしてすっかり和んでしまったのがいけなかったのかもしれない。

「こんばんは。ちょっとお邪魔するよ」

障子の向こうから聞こえてきた声。気配は今まで全くなかった。

いや、自分が油断していたのだ。

「誰だ」

急いで障子の方を向き立ち上がった。間もなく、殺気が伝わってくる。

障子が少し開いて、鋭い空気が部屋に流れ込んで来た。同時に、声の主が良く見知った人物であることに驚く。

「蒼雪、様。なんの用でしょう」

「そんなに怒らないで。いつもの物を持ってきただけだよ」

彼は手に持っている巾着袋を持ち上げて見せた。その中にはぎっしりと金が詰まっているのだろう。

「またですか。そんなものはいらないと、何度も申し上げたはずですが」

「そうはいかないよ。上からの命令なんだし、何よりこれは君の給料だ。西側を女一人で守ってくれているんだから」

「嫌みですか。挑発には乗りませんよ」

「まさか。俺は君を立派だと思ってるよ。両親が死んだにもかかわらず、周囲の反対を押し切って西側の領主の座を守り抜いた。男女の差別にも負けなかったしね。だからこうして陰陽寮から毎月給料が出てるんだよ。もちろん、一生分の生活費も保証されるし」

「知ってますよ。影じゃ皆噂してる。金はいくらでもくれてやるんだから、さっさとやめてしまえば良いのに、とね」

「まあ、君が何を考え、何を思うのかに口出しするつもりはないよ。俺はただ仕事をするだけだ。それより、一つきいてもいいかな」

蒼雪は穏やかな声と涼しげな笑顔を崩すことなく、鋭い眼で桜夜の背後の少女をとらえた。

「それ、新生種と認識して間違い無さそうだね。今、亜矢に弓を取ってくるよう頼んだんだけど、なかなか戻ってこなくて。武器はないんだけど、これも仕事だから」

彼の回りの「気」が集中していくのがわかる。

「蒼雪様、違うんです。この子は」

「おかしな話だね。桜夜、君の両親は新生種に殺されたんだろ。領主の座を守ったのも、君が自ら狩りに出るのも、復讐のためと言っ
てなかったかい。なのになぜかばうんだ」

すべて、音羽に向けられた殺気。小さな針が、一本ずつ確実に刺さ
っていく。

「それは、抱月が」

言いかけて、そのまま口をつぐんだ。庭の木の葉がざわつき始め
たのに気付いたからだ。さっきまで風は吹いていなかった。いや、
今も吹いていない。蒼雪が自らの意思で風を起こしているのだ。

そして彼の「気」が高まるのに呼応するかのように、風に乗って
木から沢山の葉が舞い降りる。風と葉が竜巻のようになって、大き
く膨れ上がり吹き荒れる。

障子が吹き飛び、壁が揺れてはがれ、畳の目がぶちぶちと千切れ
だした。

「火を使うのは得意じゃないんだけどね」

次第に風が青く染まり、木の葉を巻き込んで炎を生み出す。

無理だ。

彼の術を止められる者がこの都にいるだろうか。あるいはいたとし
ても、まず自分ではないということなどわかりきっている。

「抱月に、喧嘩を吹っかけちゃ駄目だって言われたもんな」

状況を飲み込めず、不安そうに見つめてくる音羽。安心させよう
と、桜夜は出来るだけ穏やかに笑った。そして音羽をかばうように
抱きしめる。

炎の渦が部屋ごと二人を飲み込んだ瞬間。

青い炎をじっと見つめながら、蒼雪は一人楽しそうに笑っていた。

第五話 決意を抱えて

どこか神秘的な、つまり妖しの力を感じ取ったのは、南門から帰ってくる途中のことだった。

自分達「千」の一族だけが引き継ぐ能力。

一種の魔術とでも言えばいいのだろうか。一般の古代種には見られなかった不思議な能力を自分達の先祖は持っていた。

「どういう事だよ」

後悔の念がどんどん膨らむのを感じながら、久しぶりに息が切れるほどの速さで舞い戻ってきた。

しかし家の前にたどり着いたとき、目の前に転がっていたのは二対の白虎像だった。

意図的に壊されたのだ。無造作に欠けた前足に、ひびの入った頭。

何も語らない彼らが、余計に抱月の不安を強くする。

「何があった!」

飛び込んだ部屋に、いや、壁がもうないので部屋とは呼べないかもしれない。瓦礫の上に、仰向けで倒れている人間がいる事に気付く。

「どうしたんだ。おい、音羽はどこだ。なんでお前一人で」

首筋を火傷している。白い着物はあちこち擦り切れ、血で赤い模様が出来ていた。

彼女の胸倉を掴み力任せに揺さぶるが、その首は面白いようにガクガクと笑うだけ。

「桜夜、ふざけるなよ……何やってんだよ」

一種の恐怖を覚えた。なぜ目を覚まさないのだろう。嫌だ、そんなのは嫌だ。

無理矢理に彼女の上半身を起こし、自分の腕にその背中を寄りかからせ手首を取った。かすかな鼓動があるのを感じ、少し緊張の糸がほぐれる。まだ生きている。

いくらか混乱が治まったところで、ほんのわずかに残っている気配を探る。

もちろん全部がわかるわけではない。この場に残った妖しの力から、術を使った者をたどるのだ。

しかし抱月はあの時すでにわかつていたのかもしれない。桜夜の家を出たあの瞬間から、誰が何をしに来るのかということが。

「う……抱月、か？」

うめき声に気付いて見ると、桜夜は自分の力で起き上がるうとしていた。

「間に合わなくてごめん。俺がもう少し早く戻ってきていたら」

「早く行け。音羽が」

そのつまるような口調は、むせ返るのを必死にこらえているからであろう。両手を床に付きながら話すたびに、彼女の口からこぼれ落ちる鮮血。

「連れて行かれた。多分、陰陽寮へ。蒼雪様が、音羽を狩りに来た」言葉が切れたと同時に咳き込んで、血溜まりは無情に広がっていく。

口で手をふさいで抱月に背を向け、さらに二・三回咳き込んだ後、桜夜はゆっくりと呼吸を整える。

「あたし、大丈夫だからさ」

「駄目だ、一緒に行くんだ。かついでやるから」

「ふざけるな！」

刹那、桜夜の妖しの力が一気に膨張し、それをまとった腕が飛んでくる。

軌道に沿って金の光が生まれ、思わずよけた抱月の鼻の先でうなるような低い音がした。

「いい加減に、綺麗事言つのやめろ。お前が一番守りたいのはなんだ。お前の目的は何なんだ。都へあの娘を連れてきたのは一体誰だ」血に染まった桜夜の顔が再びこちらを向いた。厳しくしかめた顔には、涙が浮かんでいる。

「綺麗事だけで……あたしも音羽も助けようって、全部自分の手のひらにおさめようなんて、そんなの無理に決まってるだろ。考えろよ、それじゃ何も残らねえんだよ！」

桜夜の吐いた血が、抱月の顔や着物に飛び散った。

「何ほうけた顔してるんだ。行け、馬鹿！」

頭の中がまた混乱に支配されようとしていた。

自分があの場合を離れたのが悪かったのか、それとも、ただ運が悪かったのだと安い答えを出すのか。浮かんた考えを検討している暇はない。

「頼むから、死ぬなよ」

強く念を込めながら桜夜を横たえる。心の中で、古くから伝わる言葉を唱える。

“貴女の回復と、我の行く先を照らし賜え——急急如律令”

急々に、律令のごとく行え。最後の言葉は、自分に言い聞かせるように。

走り出して間もなく、曇り空から大粒の雨が降り出した。

* * *

オレンジの明かりが揺らめいている。

抱月は障子を勢い良く開け、その先にいるはずの彼の姿をとらえて少し拍子抜けしてしまった。その空間は、なんとも穏やかな雰囲気満ちていた。

「やあ抱月、今帰ったのか。やっぱり懐中電灯や蛍光灯よりも、口ウソクの方が落ち着くとは思わないかい」

部屋の中央に座っている男が抱月に笑いかけた。しかしその低温な表情で、途端に居心地が悪くなる。

「ふざけないでください、兄様」

「何が？ ふざけてなんかいないけど。そっぴや今日は少し仕事が増えてしまっただけ。でも、今終わるところだから一緒に帰ろうか」

だが彼は依然としてあぐらをかいたまま動こうとはしなかった。まるで何もかも、わかっているかのように。

「音羽を、返してください」

ひたひたと、抱月の衣からは雨水がしたたる。やけに大きく聞こえるその音が、自分の鼓動と重なっていく。そしてあの桜夜の弱々しい鼓動と。

「そうか、やけに頭が痛むと思ったら。外では雨が降ってるんだね」

「蒼雪、もう一度だけ言う。音羽を返してくれ」

「その言葉、今ならまだ聞かなかったことにできるけど。あの娘は俺が殺してあげよう。そうだなあ、都に侵入しようとした新生種を、君が狩ったことにすればいいんだよ」

抱月はすでに刀へ手を掛けている。それを知りつつ、彼は恐ろしいほど冷静だった。

むしろ挑発的な口調とさえ取ることも出来るだろう。微笑を浮かべる自分と良く似た顔の男が、なんだかいつにも増して奇妙だった。

「今日届いた報告、知ってるかい。都の北側にある旧京都の前で、大型の新生種が死んでいた。倒したのは君だね。でも、それよりさらに東へ進んだところにもう一つ死体があったんだ」

「だから何だっというんだ」

「まあ、怒らずに聞いてよ。その死体というのが、面白い事に人型だったのさ。性別をわけるとすれば、女ということになるんだろうね。これがどういふことかわかるかい」

蒼雪はため息混じりに目を閉じ、その後ゆっくりと立ち上がった。もちろん、自分の傍らに置いてあった黒い刀を手にしながら。

「その女の新生種の背中には、三本の爪跡。驚く事に、君が倒した大型の新生種の爪と一致した」

「だとすると、音羽は」

「まだ検査の結果は出ていないけど、おそらく殺されたのはあの娘の母親だろうね。彼女は天涯孤独の身というわけか。さて、君は都を守る陰陽師。そしてあの娘は母も亡くしてさまよい続ける運命にある獣人。いくら興味を持ったからといって、あれでは妾にすらならないよ」

クスクスと声がする。

何がそんなに面白いのか、何に対して笑っているのか。

硬く鞘を握り締めた自分の手が、いつの間にか震えていた。

「蒼雪、今決めたよ。あの子は俺が守る。たとえ誰に何を言われようとも」

「そうか。君がどういつつもりであの娘を拾ってきたかなんて、知りたいとも思わないけど……あくまで俺に逆らうつもりだね。わかった、刀を抜け抱月」

白と黒が向かい合う。広がる空気の波紋が、徐々に張り詰めて行く。

幼い頃から何度も手合わせをしてきた。兄の癖や、細かな足の動かし方。どれも全部良く知っている。

しかしこの数年間、忙しいというのを理由に稽古をする時間はなくなっていた。その上、真剣を向け合うのはこれが初めてだ。

じりじりと間合いを縮める。

獣人相手に戦うのとはわけが違う。歳の差と実力共に、まるまる四年分違う。勝てるのかはわからない。

そしてほぼ同時に床を蹴った。抱月は迫る刃を一度受け止め、流しながらすれ違う。

再びお互いが向き合った瞬間、ふっとロウソクの火が消えて白い煙が漂う。

「俺には弓の方が合ってるみたいだ。刀は難しいね」

言葉とは裏腹に、黒の刃はこの上ないほど速く正確に切り込まれた。寸前でかわして、彼の懐目掛けて横に刀を払うが、すでに残るは残像のみ。

「こっちこっち、左だよ。ちゃんと目で追わなくちゃ。急に真剣で勝負なんて、さすがに君には荷が重すぎたかい」

また鋭い太刀が叩き込まれる事を予想して、抱月は改めて姿勢を正す。

しかしここで蒼雪の方が構えの姿勢を解いた。さも友好的に、刀を

持ったまま両手を広げてみせる。

「大丈夫かい。その腹から血が出てるのは見間違いじゃないよね。俺はまだどこも切っていないはずだけだ。さて、一体どのだれに引っ掻かれたのかなあ。そうだ、なんならもうやめようか。ただしあの娘は返さないけどね」

「それで俺が同意すると思うか？ それより、いつのまにそんな殺気の出し方覚えたんだ。兄弟に対して向けていいものじゃないと思うんだが」

「そうかな、あんまり自覚ないや。でも新生種の駆除と探索、それから調査はあくまで仕事だから仕方ないんだよ。俺に睨まれたくないんなら、君はもうあの娘とかかわらないことだ」

「あいにくだが断る」

そして一歩、踏み出そうとした時だった。

「やめてください！！」

張り詰めた叫び声。

見れば廊下に立っているのは、蒼雪の教え子だった。

「蒼雪様、抱月様。どうか、刀をお引きください」

これには蒼雪も驚いたようで、表情こそ変えないが、彼の周りの空気が一瞬にして緩くなった。切り替えの速い男だ、意図的にそうしたのである。このまま殺気のこもった部屋に入れば、途端にこの少女は立っていることすら出来なくなるはずだ。

「なんだ、亜矢じゃないか。帰ったのかと思ってた」

「申し訳ありませんでした。言いつけどおり、弓を取りに走ったのですが。それが、途中で、その、見つかってしまって」

何とも言えない気まずそうな顔。

そつと確認するように右を向き、心細い様子で視線を送る。一体その先に何があるというのか。

「亜矢、もういいわ。あとは私にまかせてちょうだい」

淡い光が部屋を照らした。

亜矢の隣へと寄り添うように姿を現したのは、提灯を持った十二単

の女だった。

少し茶色がかった長い髪。くせが強く、やわらかな曲線を幾重にも描いて伸びている。

廊下から降り注ぐ雨にさらされているのも構わず、彼女はゆったりとした歩みで部屋の中へ入ってきた。同時に華の香りが丸く漂う。

「千香」

長いまつげ、奥にきらめく瞳の黒。白い頬と桃色のくちびる。

蒼雪は噛みしめるようにゆっくりと、彼女の名を“千香”と呼んだ。

第六話 彼女の言葉 彼の誓い

「許してね蒼雪。亜矢を止めたのは私なの」

畳と着物がわずかにこすり合わさる音。

まず手前にいた抱月の傍を通り、その際やさしく微笑む。

「大丈夫、何も心配ないわ。桜夜は私の式神にここまで運ばせたから」

その後彼女が見据えたのは、無表情のまま動かない蒼雪の顔。

「血だらけだったわ、桜夜。しばらくは安静にしていなと」

それほど強い口調ではなかったが、耳の奥へ焼きつくような声だった。

「何をしに来たのかと思えば……俺のしてることが、間違いだとも言うつもりかい」

「あと少しでも遅かったら死んでいたわ。あんなの酷すぎるじゃない。獣人の子だって、怪我の手当てもせずに調査室へ連れて行っただでしょう」

仕方無さそうに肩をすくめて、蒼雪は刀を鞘へ納めた。

「わかったよ、君がそう言うのならここは下がるう。きつと俺が馬鹿だったんだ」

彼はそのまま振り向かず去った。見つめる千香を無視するかのよう。

「たまにね、怖くなるの。彼が考えていることがよくわからなくて、姿が見えなくなるのを見計らってから、千香は困惑の表情をつくる。」

悲しそうに揺れる瞳。儂くも美しい。

そうだ、こんなにも美しい人なのに。千香を困らせて、兄は何が楽しいのだろうか。

「すみません、いつも迷惑をかけてしまって」

「いいのよ。ちょっと自分勝手なところもあるけど、本当はやさし

い人だもの。それよりも、気になっているでしょう。案内するわ、音羽ちゃんのところへ」

「なんで名前を」

「桜夜ね、ずつとつわ言で音羽ちゃんの名前を呼んでたの。それより驚いたわ。まさか抱月があんなに可愛い女の子を連れてくるなんて」

「いや、あの娘は偶然なんだ。本当に偶然、最初は人間かと思ってだから、間違つて助けたというか」

開いた口が塞がらなくなりそうになったが、どうにか平静を装つて言い返した。

「まあいいじゃない、相手が獣人だって。大切なのは中身でしょ。

亜矢、抱月を音羽ちゃんの所へ案内してあげて。私は桜夜の治療をもう少し続けないと」

「はい、お任せください。では抱月様こちらへ」

自分よりも小さな二人だが、囲まれるとなんだか妙に威圧感がある。低いのに、乗り越えることが出来ない壁のような感じだ。

「亜矢、場所だけ教えてもらえば自分で」

「いいえ、私が責任持つて案内させていただきます。さあこちらへどうぞ」

亜矢のあとに続いて、ぎこちなく歩き出す。

しかし抱月の中にあるのは、単に照れくさいという気持ちだけではなかった。

これからあつという間に音羽の噂は広まるだろう。千香のように見方してくれる者も、あるいはいるかもしれない。

しかしこの都に住むものは、基本的に新生種を「敵」とみなしている。

たとえ外見が少女でも、たしかにあの娘の体には新生種の血が流れているのだ。

獣人狩りで死んだ陰陽師の仲間を思えば——敵討ちだといって、音羽を殺しにくる者もいるかもしれない。

一方で、このまま皆にすんなりと受け入れてもらえそうな予感もしていた。

音羽の背丈は調度、亜矢と同じくらいだ。おそらく年齢もさほど変わらないだろう。本当に、見た目の上では何の問題もない。

それにこれから色々都の決まりごとを教えて、適応させれば。もう少し欲を言えば、亜矢を始めとする他の子ども達とも一緒に遊んで、いつか沢山笑ってくれるようになれば。

都合の良い話なのはわかりきっている。だが、心のどこかでそんなことを考える自分がいた。

「この部屋です。おそらくまだ眠っていると」

待ちきれず、亜矢の言葉が終わらないうちに障子の向こうへ歩みを進めていた。

布団の上に座っていた少女が、くるりとこちらを向いた。

「ほうげつ！」

目が合った瞬間、彼女は間違いなく笑顔になった。

音羽、と呼び返し隣に座る。そこで自分の腹に血がにじんでいるのを思い出し、とっさに袖で隠す。

「そうか、言葉が話せるのか」

確かめるように、彼女の頭を撫でる。

「おとは だいじょうぶ だよ」

「うん、無事で良かった」

「ほうげつ ちの においが する」

「大丈夫、何ともないよ。亜矢、少し音羽の相手をしてやってくれないか。着替えてくるから」

「わかりました。でもなるべく早く帰ってきてくださいよ。音羽ちゃん抱月様が本命のようですから」

なぜ自分の顔を見て、亜矢はそんなに笑うのだろうか。首筋を搔きながら、抱月は足早に自宅へと向かった。

* * *

橙のともしびが、手のひらに浮かぶ。

傍らに横たわる桜夜の胸の辺りに、そつと落とす。橙は徐々に広がって、薄く体全体を包み込んだ。それからゆっくり溶けて染み渡るように消えた。

「いつ見ても美しい術だね」

雨の音に混ざって、小さな声がした。

先ほどとは打って変わって、温かくて心地よい声色。

「千香、まだ怒ってるのかい」

しばらくこのまま返事をしないのも良いかもしれない。

なんだか、この温度を壊したくなかった。細い隙間まで、すべてを埋めてくれるような深い蒼色の声。穏やかな気持ちにしてくれる温度。

何も言わなければ口論は起こらないのだ。

自分の気持ちをぶつけければ、同じだけ相手の気持ちもぶつかってくる。

この心地良い温度を壊したくない。そうするには何も言わないのが一番だ。

「でも、そうね。怒ってないといえば嘘になるわ。あなたの殺気、少し離れた部屋にいた私にも伝わってきた。私まで殺されてしまいそうだった」

「ごめん。それは謝る。でも新生種のことになると、自分でも抑制が効かなくてね」

間もなく蒼雪が隣に寄り添って来る。

なんだか無性に緊張して、千香は当てもなく視線をあちこちに巡らせた。だがすぐに、ぴたりと目があってしまった。

「わかってる。あなたはたった一人で抱月の面倒も良く見たし、仕事だってちゃんとこなしている。お父様もお母様も、きっとあなたのことを誇りに思ってるはずよ」

「さあね。昔は陰陽師って悪霊退治や魔よけも得意だったらしいけど。死んだ人の気持ちなんて、本当は誰にもわからないさ。俺だつてとりあえずそういう力はあるけど、死後の世界についてはわから

ない。時折夢に出てくるのは、無言でたたずむ二人の姿。じつと見てくるんだ。恨んでいるのか、悲しんでいるのかよくわからない。それにあんな両親……最初からいないほうがましだったかもしれない」

「でも最初からいなかったら、あなたは生まれてこなかったわ。それに、新生種に対して攻撃的になってしまふのは、死んだお二人の敵討ちのためでしょう」

視線をそらして遠くを見た彼の横顔。

動かない表情がいつになく苦しそうにも見える。

「最近わからないんだ。昔は敵討ちのためだったのかもしれない。けれど今じゃ仕事のためなら、ああして兄弟にだって平気で刃を向けられるんだ。両親のことなんて——良い思い出も特になかったし」

「そういえば、聴かせてもらったことないわ。死んだとしか教えられていないもの。もっとも、それについては話したくないのでしようけれど」

「じゃあ、今日は特別に教えよう。何年前になるかな……ある日突然家に帰ってこなくなったんだ。後日役人から、二人が新生種に殺されたと唐突に聞かされて。死体も見つからなかったなあ」

その苦笑いの底に潜む気持ちを、自分が汲み取ってやりたいと思った。

蒼雪がたまにしてくれる過去の話をきくと、いつも齒がゆい気持ちになる。もっと本当の気持ちを知りたい。

「なんでそんなに悲しそうな顔するんだい。馬鹿だな、俺は悲しくなんかないよ。今はこうして隣に君がいてくれるんだから」

声が震えて、千香は何も言うことができなかった。

わずかに頷いてみせたが、果たして彼が気づいたかどうかはわからない。

「桜夜のこと、ちゃんと治してやって。回復術を使わせたら、君の右に出る人はいないからね。それから、今のうちにこれだけは言っておく」

自然と重ね合わせた手のひら。少し痛いくらいに蒼雪が力を込めてくる。

「いつでも君を信じてる。俺の気持ちはずっと変わらないから。誓うよ」

確かなものを感じた。彼の目に、確かな光を。今度はしっかりと頷くことが出来た。

しかしどうしても訊けなかった。

（なぜ“今のうちに”言っておかなくてはならないの？）
これだけがどうしても。

第七話 呪文のように

音羽が都に来てから、調度四日後のことだった。

都の中心、そして政治の中心でもある陰陽寮では、緊急に会議が開かれた。

その結果、正式に音羽を都へ迎え入れる許可がおりたのだ。

これは過去に前例のないこと。

そして意外なことに、会議の席ではなぜか蒼雪が率先して音羽を支持したという噂だ。

「弟への気遣いとも言いたいのか。それとも……」

兄は陰陽博士の位についている。

周りの者よりも妖しの力が強く、優れた知識を持った陰陽師にしか与えられない位だ。この都には二人しかいない。

主な仕事は、陰陽師候補の生徒に対して指導をするいわば学校の先生だ。

そのため立場上、嫌でも会議には出なければならぬ。

だが抱月は言うなればただの一兵士。

いくら自分が連れてきた少女が問題になったとはいえ、もちろんそんな場には出られるわけがない。会議の結果をもどかく待っていることしか出来なかった。

あの噂がどこから流れてきたのかはわからない。

しかしもし本当ならば、兄に対して抱くのは感謝よりもむしろ不振や疑問の気持ちだ。

そこで見上げてくる少女と目が合うと、抱月は今頭の中にある考えを別のものと切り替えた。

「これから、さくやちゃんのとこへ行くの？」

白い朝日が廊下に長く光る。

そのまぶしさに思わず目を細めつつも、音羽は期待を込めたような顔で前を見据えた。

陰陽寮の中に、まだ人の動く気配はない。

「あれから少し良くなったみたいだから」

「さくやちゃんと会えるの、うれしい」

音羽の背中を押して歩き出した。

時が経つにつれて、この少女は沢山の言葉を話すようになってきている。

獣人がこれほどまで高い知能を持っている事に驚きつつも、やはりこみ上げてくる嬉しさは大きい。

「あいつもきつと喜ぶよ。こんなに音羽が喋れるようになったし」「本当？ 私、もっと話したい」

毎日のように獣人狩りに出ていたため、こんなにゆっくりと時間が過ぎていくのは久しぶりな気がした。

隣にいるのは間違いなく、敵であるはずの新生種。常識から考えれば、まずあつてはならないことなのだろう。

けれど今こうして、二人が並んで歩いている。

音羽も親を失った身とわかった今、抱月はますます彼女に親近感を持ち始めていた。

そして言葉では言い表せないような満足感と、少しの戸惑い——今までこんな事を考えたことがあっただろうか。抱月の心の中はいつになく穏やかだった。

* * *

音羽の顔を見た瞬間、桜夜は嬉しそうな顔をした。

まだ起き上がることは無理なのだろう。それでも桜夜は布団の中から重たそうに腕を伸ばし、少女の手を取る。

「よし。ちゃんと生きてるな」

「さくやちゃん、ありがとう」

音羽はそつと手を握り返した。

「もう駄目かと思った。はは、あたしもまだまだ弱いな」

「そつという問題じゃないだろ。それより、具合はどうなんだ。少しは良くなったのか」

「少しはね。まあ、寝てりや治るさ」

つまらなさそうな顔をしている。そういえばいつだったか桜夜が足を折った時、まだ治りきらないくせに、つまらないからと勝手に走り回っていたのを思い出した。

彼女は運悪く階段から転がり落ちて回復が余計に遅れ、その時一緒に走り回って遊んでいた抱月は色んな人からこれでもかというほど叱られたのだ。

「勝手にいなくなるなよ。お前はちよつと良くなるとすぐに動き回るからな」

「はいはい、ご忠告感謝しますよ」

すました顔をして返事をした。おそらく忠告なんて全然聞いていないのだろう。

「今日は音羽に都を案内してあげるのか」

「いや……仕事なんだ」

思ったよりも明るい声は出てきてくれなかった。自分でも驚くほど重い一言になってしまい、一瞬にして気まずい空気が流れる。

「音羽のことは、亜矢に頼もうかと思う」

仕事——獣人狩りにでるのは仕方のないことだ。

獣人は妖しの力に惹かれて都にやってくるらしい、という説がある。この都の者は皆、わずかだとしても妖しの力を持っている。それゆえに、毎日のようにこの力は使われる。

傷ついたものの回復のため、占いのため……千の一族の日常には欠かせない力だ。

現に獣人は都の近くを徘徊しているし、侵入してこようとする者もいる。妖の力に惹かれてやってくるといふ説は、正しいものとして皆が信じている。

「じゃあそろそろ行くから。また来るよ」

これ以上は何も言えなかった。

音羽が仕事について何かたずねてきたらどうしようか。それだけが気になって。

抱月の胸中を知ってか知らぬか、桜夜は音羽だけに笑いかけた後、頭から布団をかぶってしまった。

穏やかな気持ちだが、どこか遠くへ消え去っていくのを感じていた。頭の隅の方から、気持ちが切り替わっていく。

新生種を駆除しなくてはならない。それが出来るのは、自分達だけなのだ。

どちらが正義かなんていうのは問題ではない。こちらから見れば向こうが悪だが、向こうから見ればこちらが悪なのだ。

自分達を殺そうとするなら、その前に殺さなくてはならない。

幼い頃から教えられてきた理屈を頭の中で何度も唱えた。呪文のように。

“ どうして殺さなくてはならないのだろうか。共存する方法はないのだろうか ”

「綺麗事」という隙間から湧きあがってくるその疑問に蓋をして、呪文のように。

* * *

「私の名前は亜矢です。よろしくね」

緊張感を覚えつつも、亜矢は笑顔で話しかけた。

すると目の前にいる少女は一瞬ひるんだような顔をしたが、すぐに口の両端を吊り上げてみせた。

「私、音羽です。よろしく」

「じゃあ、今日は一日音羽のことよろしく頼むよ。なるべく早く帰れるようにするから」

隣に立っている抱月が音羽の背を軽く押して、亜矢が返事をする間もなくこちらに背を向けた。彼の雰囲気や表情が、普段見せているものとはどこか違う近寄りがたいものだということに気づいた。

「お預かりします。お氣をつけて」

去っていく抱月は、こちらを一度も振り返らなかった。きっと今は音羽の顔を見たくないのだろう。

「抱月、どこへ行くの」

「お仕事だよ」

これしか言葉が思いつかなかった。

音羽はどう思っているのかわからないが、誰だって同種を殺されるのは気分が悪いだろう。

陰陽師にとつての仕事とは、獣人を狩ることなのだから。

「さて。じゃあ外に出て都の中でも歩こうか。お金は預かってるし。音羽ちゃん、好きなものなんでも買ってあげるよ」

「私外に行きたい」

「じゃあ早速行こう」

「……外に行きたいの」

遠くを見据える瞳。

彼女が行きたいのは、この都——「京^{きょう}栄^{えい}」の中ではないらしい。

「外って、都の外に行きたいの？」

少女は黙って頷き、それ以降は視線を泳がせ亜矢と目を合わせようとはしなかった。

ふと疑問が浮かぶ。外の世界へ行きたいという重大な事を、どうして抱月ではなく自分なんかに言うのだろうか。

「あのね、この世界には安全なところがこの都しかないんだよ。人間はもう、私達陰陽師の一族しかないんだよ」

「どうして。私は、都の外から来たよ。外にも沢山人がいたよ。どうして陰陽師だけなの」

それは人ではないと、どうして言えるだろうか。

彼女にとつてみれば、獣人も人なのだ。生きている物に「人」という言葉を当てはめるのなら、の話だが。

「ごめんね。私は外にでちゃいけないから。音羽ちゃんも、もう外には出ないで。お願い」

「でも……抱月は外に行ったんでしょ。私も一緒に行きたい」

あなたの一族は、この都を襲って来るんだよ。本当はあなたも殺されるはずだった。

私が生まれる前からずっとずっと、獣人と陰陽師は敵同士。だから

陰陽師は獣人を殺すんだよ。それがこの世界の決まり。

口が裂けても言えないその言葉は、頭の中を渦巻きながらやがて消えていった。

獣人について、詳しいことは亜矢にもまだわからない。だから安易なことは言えない。

「そっか、抱月様のこと心配なんだね。でも抱月様はちゃんと帰ってくるから大丈夫だよ」

今だ彼方を見つめる音羽の手を引き、亜矢は歩き出した。

第八話 煙の行方

刀を振りおろせば、一つまた一つと死体が増えていく。

抱月は無心のままに、目に付く敵は全部斬っていった。

獣人は敵だ。だから狩らなくてはならない。

この気持ち揺るがないようには、とにかく沢山敵を斬れば良い。そのために、獣人が多く住み着いている海岸沿いに来たのだ。都から一番遠い場所に来ることで、何もかも忘れられるような気がして、体に傷の数が増していくと同時に、白い刀は獣人の血を吸っていく。

とにかく何か理由が欲しかった。彼ら獣人を斬る理由が。

心の中に生まれた疑問。

かつて、あの旧京都がまだ繁栄していた頃。そこには、獣人という生き物がいなかったはずだ。

それから世界が崩壊しかけ、陰陽師だけが生き残れた。獣人が現れたのは、それから間もなくのことだったという。

抱月が生まれる、何十年も昔のことだ。

都を襲う獣人を狩る。当たり前前の事実が、心の中で形を変えようとしていた。

獣人はなぜ存在するのだろうかという形に。

気が付くと、抱月の周りには鮮やかな彼岸花が咲き乱れていた。

「こんなに、斬っていたのか……」

妖の力を持つ自分が少し気を集中させて歩き回るだけで、つられた獣人が面白いように寄ってくる。後はただ斬ればいいだけだ。自分達の敵は自分達で倒さなくてはならない。

頭の中でまとまらない考えに蓋をしようと、一瞬刀を下ろす。

だがその時、背中に思い切り衝撃を受け、抵抗する間もなく前のめりに倒れこんだ。

何が起きたのかと考えなくともわかりきっていた。

鋭い痛みと骨の軋む音。背中に乗っている獣人は、このまま自分を噛み殺すことができるだろう。

うなり声が頭の上から降ってくる。しかし恐怖は感じなかった。ために体に力を込めてみるが、思った以上に体力が残っていないようだ。だらりとした右手が、刀を握るのをやめた。

ふと、手のひらが真つ赤に染まっているのが目に付いた。そこで初めて、自分の血の匂いが獣と変わらないのに気づいた。

（そうだ、音羽とも――）

だが、思考をさえぎるように獣人の叫び声が聞こえてきた。ふわりと背中への重みが消える。不思議に思っただけで起き上がると、そこには一人の陰陽師がいた。

「おいおい大丈夫か。こんな雑魚に殺されなくてよかったなー」

刀を獣人の死骸から抜きつつ、黒い狩衣の男はこちらを向いた。

「梓紗あずさ、どうしてここに」

「いやあ、たまたま通りかかったんよ。抱月こそ、なんでこんな所にいるんだ」

逆に聞き返されて戸惑うが、正直に言う必要もないと思い黙っていた。

「あ、抱月また頭掻いてる。その癖はまだ直つとらんかねー」

はつとして手を下ろした。それから何事もなかったかのように立ち上がり、刀を拾い上げて鞘にしまった。

すると梓紗はニヤリと笑い、あつという間に抱月の目の前まで寄ってきた。

「一体何を考えてたんだ。そうか、考え事してたからぼんやりしてたんだな。好きな女でもできたのか。怒らんから言ってみるよ」

八重歯とつり目。人相の悪い梓紗がそうやって笑うと、何か不吉な予感がしてくる。

彼はまだ十七歳で抱月よりも三つ年下だが、やたらとずっずっしい上に妙に勘が鋭い。

「じゃあ訊くが……お前はなんのために戦ってる」

「い、いきなり何だよ！？ 突拍子もないことを平然ときいてくるやつだな」

彼は目を一度大きく見開いて、それから腕組みをする。

しかしすぐに懷に手をつ込み、煙管を取り出す。間もなく白い煙が辺りを漂い、梓はそれが消えていくのを面白そうに眺める。

この光景を見るたびに、抱月はこの男の傍らに“儚さ”という二文字が寄り添っているように思えてならなかった。

「うーん、あえて言うなら戦わなくちゃまずいから、かな」

ひとたび口を開くと儚さはどこかへ吹き飛び、後にはただ笑っている梓紗の顔があった。

「陰陽師って、遙か昔は暦作ったり時刻を測ったりしてたんだろ。

まあ、今もお役人なわけだが。でも俺たちはこんなに力を持つてるんだ、どこかで発散しなくちゃ。そのうち狂った奴が出てきたりしたら、京栄の都で殺人事件が起こって——いや、考えすぎかな」

彼は片手に煙管を持ったまま、再び刀を抜いた。

「それに自分が強くなっていくのって面白いだろ。だから俺は戦うんだ。これもこっそり吸えるしね。家で吸うと親父に怒られるんよ」
悪びれたように肩をすくめ、もう一度ゆっくりと煙管を吸う。

「じゃあ、そろそろ仕事再会するか。またな抱月。今度は気をつけろよ」

去っていく梓紗を見送り、抱月は都へ歩き出した。

思い出したように傷が痛み出し、予想通り動けなくなるほど痛くなつた。

しかし、今は一刻も早く京栄に帰りたかった。

梓紗の言うことはもったもなのかもしれない。そして、彼はその信念のもとに戦っている。では自分も、一つの考えの下に行動を起こすべきなのではないだろうか。

（そうだ、なぜ獣人が存在するのか……それを確かめたい）

もし何もかも調べつくして、本当にただ獣人が自分達を殺すためだけに生まれてきたとわかれば、このまま狩り続けよう。

しかし、彼らの存在理由が別なところにあるのだとすれば。

音羽は言葉を喋ることができた。

獣人にも、高い知能をもった者がいるということだ。だから、彼らの意思を理解することができれば。

自分は、戦いのない世界を望んでいるのかもしれない。

無意識に浮かんできた言葉は、やがて抱月の頭の中を支配していた。

第八話 煙の行方（後書き）

お久しぶりです。大分更新が遅れてしまつてすみませんでした。
今月からまた沢山執筆していきたいと思ひますので、よろしくお願
いします。

第九話 涙

都では、一週間後に迫った“陰陽祭”の準備が始まっていた。

この祭りでは、陰陽寮の庭で楽器の演奏会があったり、役者が舞を舞ったりする。

そして陰陽師たちは、自分の式神を使って列を組ませる。それが都の城壁に沿って、祭りの間ぐるぐると行進して回るのだ。

古代種の先祖達は、“回る”ということで守りの神が降りてくると考えた。

つまりそこには、新生種が都へ侵入してこないように、という願いが込められている。

「千香様の式神は、いつ見ても可愛らしいですね。もちろん、今年もこの子たちを祭りに出すんですよ」

「ええ、そのつもり」

黄色い小鳥を肩から腕に乗せる。

その黒くて丸い瞳や、せわしなく首を動かす様子に亜矢は自然と微笑んでしまう。

「まるで本当に生きてるみたい。素晴らしいです」

庭先にある木の枝からは、同じような小鳥たちの清らかな鳴き声が聞こえてくる。

傍らを見ると、桃色の小鳥が千香の細い指先にそつと舞い降りたところだった。

黄緑色の十二単がよく似合う人だ、と亜矢は思った。

木々の色。遥か昔は緑が地面を覆っていたという。まさに自然の色とはこの事だ。

「ありがとう亜矢。でもあんまり褒めすぎじゃないかしら」

控えめに微笑んで、それから指先の小鳥を撫でる。すると小鳥は一瞬形を失い、すぐに一枚の紙に変化した。

「私も早くこんな技術を身につけたいです」

「亜矢ならきつとできるわ」

それから自分も千香と少し感覚を空けて縁側に座り、庭で式神と戯れる少女に目をやった。

「良かった。音羽ちゃん大丈夫そうね」

今の声が聞こえたかの、少女がこちらを向いた。そして頭や肩に沢山の小鳥を乗せたまま、歩み寄ってきた。

「これは、とり、っていうの？」

「そう、鳥だよ。気に入った？」

音羽は嬉しそうにうなずいた。

彼女は新しく覚えた単語を、本当に大切そうに発音する。

亜矢がほんの少し言葉を教えただけなのに、あっという間に意味を理解して使うことができた。最初から言葉を知っていたのではないかと思うほどだ。まるで、無くしていた物を取り戻したかのように「この子達と遊びたくなったら、いつでもここに来ていいのよ」

千香が笑いかけた。

「うん、いつでも……」

音羽も笑顔を半分作りかけたが、そのまま表情を曇らせてしまった。途端に式神達が紙切れに戻り、ひらひらと散った。

「どうしたの」

胸に手を当てたかと思うと、苦しそうにして膝をつく。

「音羽ちゃん、大丈夫？ どうしたの」

亜矢が横にかがんで音羽の背中をさすってみる。しかし彼女はうめき声を上げるだけだった。一体何事かと、亜矢と千香が顔を見合わせたその時。

「血の……におい」

「え」

「血のにおいが、する」

それまでただ苦しそうにしていた音羽が急に立ち上がり、宙を見つめたまま何か小さくつぶやく。そして間もなく陰陽寮の出口へ向かって走り出した。

「千香様、私は、ど、どうしたら」

「追いなさい。行けばわかるわ。大丈夫、私はちゃんとここで待っています」

千香はすでに何事か悟っているようで、亜矢に向かってしっかりと頷いてくれた。

その一言で不思議と足が軽くなった。

門を出て正面の大通りに音羽がないのを確認すると、今度は左右に首をめぐらす。

左の道に小さくなっていく少女の姿を見た。だが、あつという間に祭りの準備で賑わう人々の中に消えてしまった。

「急がなくちゃ……もしかして西門へ向かったのかも」

とりあえず代役は配置されたようだが、桜夜が不在の西門はいつもより警備が薄いと言えるだろう。もし今都に危険が及べば――さまざまな不安を抱えながら、亜矢は走り出した。

* * *

目の前がだんだんと揺れ始め、足が動かなくなっていく。

西門にたどり着いた瞬間、抱月はついに倒れこんだ。

前方から、驚いた門番達の声が聞こえてきた。駆け寄ってくる足音。名前を呼ばれているのがわかった。

「どうなさいました。しっかりしてください！」

「今陰陽寮に運びます！ もう少しの辛抱です」

しかしもう喋る気力が残っていない。このまま気を失うだろう。そう思った瞬間。

「抱月！」

かすかに聞こえた、少女の声。

「抱月、どうしたの。抱月」

それはだんだんはつきりとしていく。

閉じかけていた目を無理矢理開けると、駆け寄ってくる少女の姿が見えた。

門番達の制止を振り切って、間に割り込んでくる。そしてうつ伏せ

になっている自分を起こし、顔を覗き込んだ。

「ねえ抱月、血が出てるよ。沢山、血が」

ぽたりと何かがこぼれ落ちた。

「音羽……泣いて、いるのか」

少女の目から、一滴また一滴と涙の雫が落ちていく。

確か前に一度音羽が泣いた時は、おおよそ人間とはかけ離れた泣き方をした。あれはまるで獣のようだった。

しかし、今自分を見ながら涙を流すその姿は。

「痛い。苦しい。怖い」

単語を一つずつ並べて、音羽は胸を押さえた。

「死ぬの？ 抱月、死ぬの？」

「死んだりしないよ」

音羽の涙は抱月の顔や喉に落ち、着物に染みをつくった。

間もなく、体中に温かさを感じた。引き裂かれるような痛みが、少しずつ薄れていくような感覚に陥る。

いよいよ気を失う寸前なのだろうか。瞼が重いような気もする。

「これは一体！？」

すると突然、門番達の驚く声がした。不思議に思っただ目を開けると、光のようなものが見える。自分の体が光っているのだと認識するまでに、そう時間はかからなかった。

傷口の痛みが和らいでいくのがはつきりとわかった。

ために、自分の力で起き上がってみる。今までのだるさが、嘘のように吹き飛んでいる。そこらじゅうに出来ていた傷を見ても、どれもがうつすらと跡を残すのみ。血が出ている箇所は一つも無かった。どうやら錯覚ではないらしい。

「音羽、お前」

いまだに涙を流している少女を見た。

光の正体、それはおそらく。

「もう大丈夫だ。ありがとう音羽」

「よかった。大丈夫なんだね」

音羽が一度袖で目を拭くと、涙が止まった。

それとほぼ同時に、抱月の体を包んでいた光もゆっくりと消えていく。

「音羽ちゃん！」

亜矢の声がした。息を切らしながら走ってきたようだ。そういえば、音羽の面倒をみるよう頼んでおいた事を思い出す。

どうやら音羽のことを追いかけてきたらしく、自分の姿を見ると酷く驚いた顔をした。

「抱月様、どうなさいました！？」

辺りのおびただしい血痕と抱月を交互に見る。

「抱月様、お体は……」

「ああ、なんともないよ」

立ち上がって音羽に手を差し出す。彼女は嬉しそうに笑って、腕を絡ませてきた。

「さあ陰陽寮へ戻ろう」

それから亜矢にも付いてくるように目で促すと、呆然としている門番達を横目に歩き出した。

第十話 内通者

悲しみと癒しの念がこめられた、微弱ながらも確かな力を感じた。本当に自然的な、たとえば言うならば空気が風によって揺れる程度のもの。何気なく過ごしていれば、この力に絶対気がつかなかっただろう。

これが自分たちの使う妖しの力ではないと察知した蒼雪は、慌てて陰陽寮を飛び出した。

そしてたどり着いた西門には、抱月と音羽の姿があった。

今でも信じがたい光景。あの少女の涙が目に焼きついて離れない。

「まさかあの娘が」

自分自身、この上ないほど動揺しているのがわかる。こんな感覚、久しく味わったことがない。かすかに震える指先。それはまるで、落ち着き方を忘れてしまったかのように。

「これで、旧生種の未来が……」

* * *

年に一度の陰陽祭が始まった。

つい先ほどから、陽気な太鼓や笛の音が聞こえ始めた。

きつと華々しい飾りが、京栄きやうえいの都中を彩っていることだろう。人々の喧騒がそれに重なり合い、まるでいつもの何十倍も人がいるみたいだ。

「大陸の方々がやってまいりましたよ」

片手に黒いものを持って、千香が部屋に入ってきた。

「たった今ご挨拶を済ませたところです。ほら、こんなに可愛らしいものをいただきましたよ」

彼女が持っているのは、色鮮やかな刺繍が施された黒い犬の人形だった。

大陸に古くから伝わる工芸品のおもちゃだ。

「それ、見たことあります！ いいなあ、ほしいなあ……音羽もほ

しいよな？」

いきなり布団から体を起こした桜夜は、そばにいた音羽の両肩をつかんで顔を覗き込んだ。音羽は驚きながらも、千香の手に乗っている人形をちらりと見ると、急に目を大きくして口をぽかんと開けた。

「おお、音羽も気に入ったみたいだぞ。というわけで抱月、買ってきてくれ」

「言うと思ったよ」

期待の目が抱月に向けられる。

「なんだよ。せっかく音羽が興味を持ったんだから、買ってきてやれって」

あの人形は十二支をかたどったものだ。

架空上の生き物もいるが、実際にモデルとなった動物たちは、天変地異が起きた際にほぼすべて死滅してしまったらしい。

だから今となつては、あのような人形や絵巻物だけが、当時の彼らの姿を知る唯一の情報でもある。大陸でしか作られていないので、日本では人気が高い品物だ。

「高いんだよなあ……」

「じゃあ蒼雪にたのんでみたら。私もあの人と一緒にいたから貰えたようなものだし」

「千香様、そんなに簡単に言わないでくださいよ」

「あらどうして。あなた達は兄弟なんですから、そんなこと簡単でしょ」

この間刀を交えて以来、蒼雪とはほとんど口をきいていない。

一週間ほどを振り返ってみても、どうやら自宅には帰ってきているようだが、一度も顔を合わせなかった。

陰陽寮内の廊下で何度かすれ違ったりもしたが、お互い顔をあわせようとはしなかった。盗み見た兄は、いつ見ても何一つ変わらない。その整った顔で、無表情のまま、ただ抱月の横を通り過ぎるだけ。抱月を無視するためにわざとやっているのだろうか。それとも、何

か別のことを考えているのだろうか。

「抱月、どうしたの」

音羽が心配そうな顔をしてこちらを見ていた。気づけば、桜夜と千香も同じように自分を見ている。

「いや、なんでもない。じゃあ行ってくるよ。種類は何でもいいだろ」

「私、一緒に行ってあげる。抱月、一人が嫌なんですよ」

あまりに唐突な言葉だった。一瞬、誰がその言葉を発したのかわからなかった。

目が合うと、音羽がにっこりと笑った。

桜夜の隣から立ち上がった、あっという間に抱月の隣に並んだ。本当に何の違和感もなかった。まるでそれが当たり前のように。

「亜矢ちゃんにも、一つあげても良い？」

頷いてやると、音羽はまた嬉しそうに笑った。

たったそれだけのことだが、自信が湧いてくる。

きっと自分たちは、同じように生きていけるのだと。

あれから、都の者ならば誰でも見ることができる本などはすべて調べた。

しかし獣人に関する書物は、ありきたりなものしか見つからなかった。

あとは現在この都で政治の中心を司っている陰陽頭のもとにしか、そういった資料は保管されていないだろう。

どの文献も口をそろえて、「獣人は陰陽師に災厄をもたらす生き物である」と抱月に言う。それはきわめて簡潔で、しかし獣人と自分たちの世界を遠ざけるには十分な言葉だった。

自分で答えを探すしかなさそうだ。

それに気づいたときは、途方に暮れるしかなかった。何もなければ良かったのかもしれないとさえ思った。

ただ当たり前に自分たちは獣人を狩り、毎日を暮らしていけばそれで良かったのかも知れない。そうして少しずつ歳をとって、やが

て死んでいく。それが普通の生き方なのだ。

今までがそうであったように、これからただ、そうしていけば良いだけのこと。

でも、自分は出会ってしまった。

同じように笑い、泣き、話し、生きようとする存在に。

音羽の存在が、自分を動かそうとしている。獣人とは何なのか、共存する術はないのかと。

当たり前のように、二人がこうして並んで歩いている。それが今はまだ定義のない不安定なものだとしても……。

* * *

「確かに、あの少女で間違いありません」

そう言つてやると、向かいに座る朱色の衣を着た男が笑った。すべてを嘲るような顔をしていた。

この男の命令を聞くのは、死ぬほど嫌で不快だった。

「こちらの準備が整うまで、あと少し時間がかかる。それまでお前はあの娘を監視しておけ。だがそう遠くないうちに、あの娘は引き渡してもらふことになるだろう」

「承知しました。お任せください」

すると一瞬、弟の顔が浮かんた。

もちろん、反対するだろう。自分に刃を向けてくるかもしれない。

そうだ、自分に刃を向けさせればいいのだ。怨まれるのは自分だけがいい。彼らは何も知らなくていいのだ。ただ当たり前の日常を過ごしているだけで、簡単に世界は動いてくれるのだから。

“成り行き” なんと都合の良い言葉だろう。

すべてその言葉のせいにしてしまえばいいのだ。怨むなら、自分を怨んでくれてかまわない。それで自分の大切な者達を守れるのなら抱月がこちらへやってくる気配を感じた。あの少女も一緒だ。

せめて、今だけは――

「では私はこれで。また何かありましたらお呼びください」

出て行こうとして障子に手をかける。すると背後であの男がまた

笑ったのがわかった。

「蒼雪、大陸語が上手くなったな」

「……いいえ、褒められるようなことではありません。当たり前のことです」

聞こえないくらい小さな声で言うと、蒼雪は逃げるようにして部屋を出た。

第十話 内通者（後書き）

久しぶりの更新です。いつも読んでくださる方々には、大変お待たせしてすみませんでした。
またよろしく願います

第十一話 消え行く安息

涼しい風が袖を通り抜けていく。

三日間続いた祭りも最終日となり、屋台通りを歩く人の数もまばらになってきた。

この日は集会所などで、宴会を楽しむ人のほうが多いようだ。

人ごみを避けるため、抱月は今日を選んで音羽を連れてきた。

特に、陰陽寮をはさんで北に伸びるこの大通りは、南大通りに比べて人が少ない。

抱月は気にしていないが、都から北門を出てしばらく行くと墓場があるので、普段から好んで近寄る者はいない。

「抱月、あれはキツネのお面でしょ。こっちはウサギのお面」

屋台の店頭に並べられたお面を指差して、音羽が言う。

「それで私が持つてるのは、ネコのお面」

夜の通りに灯る屋台の明かり。少女が光に包まれて笑う。

気を取られ、しばらく見とれていた。まるで自分の心境を映しているかのような、ぼんやりした光。そしてまた思う。このまま同じように、日々が平穏に過ぎていけばいいと。

「抱月、ねえ聞いているの？」

「ごめん、ぼんやりしてた。次は何を見ようか」

音羽が口をつぐむ。何かを訴えたくて、しかし彼女はまだその気持ち言葉を置き換えることができないのだろう。

眉根が少し寄って、視線が下がる。やがて、小さな声が聞こえた。

「どうして……抱月は、たまに寂しそうなの？」

返す言葉が見つからなかった。

抱月は何かを言おうと息を吸うが、そのままため息に変わる。いつの間に音羽は相手の感情を、顔色を、伺うことができるようになったのだろう。

「なんでもないんだ。気にしなくていいよ」

だが音羽は抱月を見上げ、疑わしそうにじっと見つめてくる。そこでためしに笑って見せると、彼女も安心したように笑った。「何だ、抱月もついに逢引きなんかするようになったのかい」

突然、すぐ耳元で声がした。ぞつとして肩をすくめる。

すると相手はそのまま吹き出して笑ったので、抱月の横顔に唾が飛んでくる。

「お前、剣術は凄いいけど普段は鈍いよな！ 本当、こんなに近寄っても気づかないなんて面白すぎ」

八重歯を思い切りむき出して、大笑いする少年。袖で顔を拭きながら、抱月はその小憎らしい顔を睨み付ける。

「汚いだろ馬鹿！ お前こそ、もつと普通に話しかけて来いよな」

「悪いがこういう性分だね。人を驚かすの、大好きなんよ。ま、元氣そうで何より」

次にそのつり目が音羽の方を見たかと思えば、一瞬の間も与えず傍に寄って顔を覗き込む。

「ふーん、可愛いねえ……あ、俺は梓紗あすひっていうんだ。君が噂の音羽ちゃんかい」

彼の人相の悪さに気圧され、音羽は少し戸惑ったようだ。

おまけに、梓紗が着ている浴衣を見るのはこれが初めてだろう。確かにあれは簡単に着られて便利なのだが、陰陽祭という公的な祭りでは普通誰も着ない。

なんだか違和感のある身なりをしている、怪しいやつと思ったに違いない。

だが音羽は意外にもすぐに返事をした。てつきり嫌がるかと思ったのだが、梓紗の少し棘のある雰囲気逆に興味を持ったらしい。

「私は抱月とお祭りを見に来たの。お兄さんは一人で見に来たの？」

「そうなんよ。俺、寂しい独り者だからさ。そうだ、俺も一緒にいいかい」

「いいよ、ひとりは寂しいよね。じゃあ一緒に飴買ってもらおう。ね、抱月いいでしょ」

「買ってくれるよな」

二人の期待に満ちた目が抱月を捕らえた。

もつとも、少年の方は明らかに何かたくらんでいるような顔だが。

「梓紗……頼むから、音羽に変なことを教えないでくれ」

「俺、別に何もしとらんけど。なあ音羽ちゃん。さて、どの飴にしようか」

「私ね、あっちに売ってたやつがいい」

「だってさ。ほら行くぞ」

梓紗は音羽と抱月の手を繋がせると、後ろに回って背中を押してきた。

「お前なあ、せっかく祭りに来てるんだから、そんなシケた面やめとけて。さつきから俺はどうにも気に入らんね。こんな可愛い子連れて歩いてんだから、ぼさつとしてると酔っ払いに連れてかれちまうぞ」

まもなく飴屋の前に来ると、音羽は夢中になって選り始めた。

その様子を確認し、さりげなく周囲をうかがうと、梓紗は無表情で抱月に言った。

「大陸のやつらが来てるの知ってるだろ。お前さつきからその連中に着けられてるって知ってた？」

思わず息を飲んだ。あまりにも突然の言葉に、動揺しかける。

だがここで焦ってはいけないと判断し、辺りを見渡したい気持ちをぐっところえる。変に視線を泳がせてはいけない。抱月はそのまま音羽を見続けた。

「気づかないのも無理ないさ。相手は隠密隊だ。奴ら今じゃ、まさに陰陽師の“陰”を司ると言っても良いからな。気づかれないようにコソコソ隠れるのが大好きらしいよ」

「まさか、音羽を」

少年は何も返事をしなかった。無言の肯定——彼は音羽の隣へ行き、一緒に飴を選び始める。ごく普通の、十七歳の顔になる。

抱月は飴屋を離れるまでに、自分たちを見張る者の気配を探った。

前後左右に、一人ずついるようだ。距離もさほど遠くはない。知らぬ間に囲まれていたなどは、夢にも思わなかった。

一方の梓紗は、相変わらずのんきな顔で音羽と並んで歩き、話をしている。

すっかり馴染んだようで、音羽はしきりに笑顔を見せた。

つられて抱月もつい気が緩みそうになるが、依然として全く消える様子を見せない四つの気配に対して神経を尖らせ続けた。

どれほど時間が過ぎただろうか。

屋台の明かりが一つずつ消え始めた頃、梓紗は抱月の方を振り向き、一瞬目配せをした。

そして北門の方向へ足早に歩き出す。

陰陽寮には大陸からの使者がいる。敵の懷に飛び込むわけにはいかないと判断したのだろう。

そのうちに屋台がふつと途切れ、辺りが途端に暗くなる。

紫の夜の色に染まった北門が、だんだんと大きくなる。

この辺りは都を拡大するための工事が行われているので、日が沈むと全く人氣が無い。

新しく建設されている骨組みだけの家と、その近くに大量の木材が無造作に積み重ねられている。

もうすぐあの北門も、もっと遠く、墓を越えたずっと向こうに立て直される。城壁も壊され、墓も都の中へ取り込まれるだろう。

そうなったら、夜な夜な幽霊が都の中を歩き回るかもしれない――

「どこ行くの？ もうおしまい？」

光が遠ざかるにつれて、音羽の表情が強張っていく。

「うん、これで終わりだよ。そうだ音羽ちゃん、一つ頼みがあるんだけどさ」

軽やかなその口調は、いかにも友達同士の会話のようだ。

「これから何があっても、抱月から離れちゃ駄目だよ。約束な」

誰が最初にそうしたのか、いつの間にか三人の足は止まっていた。間もなく小さな明かりが四つ、四方から囲むようにしてこちらへ近

づいてくる。まるで行き場をなくして徘徊する靈魂のように。

梓紗は今にも泣き出しそうな音羽を、文字通り抱月に押し付けてきた。そしてすぐに背中を合わせると、

「隙を見て逃げる。それでいいよな。抱月は音羽ちゃんを守ることだけに集中しなよ」

姿がぼんやりと浮かんできた敵を見据えたまま、抱月は刀を抜いた。

第十一話 消え行く安息（後書き）

だいぶ更新がおくれてしまいですみませんでした。

第十二話 任務

闇の隙間から、白い狐の面が現れた。四人とも、忍者のような出で立ちである。瞬きをする間に見失ってしまいそんな黒い衣。

「お面つけて登場とは良いご趣味で」

梓紗は懷から短剣を取り出した。鞘から抜くと、刃は呼応するかのように彼の妖の力を吸い取り始める。

「待て……やっぱり駄目だ。お前はこういう場所で力を使うんじゃない」

腕を捕まれたと頭が認識する前に、抱月は音羽を自分の方に押し戻してきた。

一瞬驚いて彼を見る。だが目が合った瞬間、それ以上何も会話は要らなかった。

刀を抜く抱月を背に、梓紗は音羽を抱きかかえて走り出す。

「抱月！」

小さくなっていくその姿を見て不安が広がったのか、音羽は一度その名を叫ぶ。

だがいくら向こうへ戻ろうとしたところで、もうどうにもならないと気づいたようだ。

齒がゆさからか、小さく唇をかねて眉根を寄せた。

「そうそう、ここは我慢だよ。俺だって、久しぶりにいい感じの敵と戦えるチャンスを、こうしてみすみす逃してんだからさ」

しかし、これほど大事にしている少女を簡単に自分に託してくるなんて。これはまた随分と信用されてしまったものだ。

「でもなあ、抱月怒るだろうなあ……だけど、仕方ないよな。俺、生徒なんだから」

「一人で何喋ってるの？」

「え、あ、いや、何でもないよ」

「抱月、大丈夫だよな。すぐに戻ってくるよな」

真っ直ぐな言葉と眼差しに、思わず心臓が高鳴る。

どうしてこの期待に満ちた言葉に、否定の返事を投げつけることが出来るだろうか。

梓紗はただ、黙って頷いた。

正直なところ全然わからない。大陸の人間がどの程度の実力を持っているのかなど。

今まで自分達は、この限られた世界の中で生活してきたのだ。

都の中で訓練を受け、都のために獣人を狩ってきた。

自分の父親も、母親も、この京栄で生まれ育った。そして自分も、何の疑いもなくこの世界を信じて生きてきた。

それが突然、同じ妖の一族であるはずの人間に刃を向けられた。

先ほど敵の気配を軽く読んでみたが、自分にはまだそれを完全に把握することが出来なかった。もし自分があの人と一度に戦えるのかと問うてみれば、その答えは――

「くやしいけど、抱月にはまだ敵わないな。まったく、世界は広いなあ。でもまずは与えられた任務を忠実にこなそうかね」

たどり着いたのは、小さな家の前だった。

窓から光が漏れている。どうやら在宅のようだ。

梓紗はため息にも似た深呼吸をして、そっと音羽を下ろした。

「大丈夫。先生は確かに俺に言ったもんな」

自分自身に言い聞かせ、少女の手をしっかりと握ると、意を決して戸を開けた。

「先生、俺です。つて、どーせわかってるか」

その男は部屋の奥の机の前で、一人本を読んでいた。

「梓紗、早く戸を閉めなさい。相変わらず行儀が悪いね」

はいはい、と適当に受け流し、梓紗はまず音羽を中へ上がらせようと背を押した。しかし。

「あ、梓紗……あの人」

蚊の鳴くような声を出し、少女はその場から動こうとしなかった。彼女の視線の先にいる男は、たった今気がつきましたとも言わん

ばかりに、何気なくこちらを向く。

そして能面のように薄く静かに笑った。

青みがかった黒い瞳が、おびえきった少女を見つめ、

「へえ、俺を覚えていてくれたようだね音羽ちゃん」

数週間前の夜、梓紗はこの都で何が起こったのかを知っていた。

その時この獣人の娘をかばった桜夜がどうなったのかも、もちろん本人の口から聞いた。

すべて承知の上で、ここへ来たのだ。

「蒼雪先生。これで任務完了でしょ」

「ああ、ご苦労だったね。中へ入りなさい。それから、亜矢。出ておいで」

蒼雪は本を閉じ、自分のすぐ左隣の障子に向かって声をかけた。間もなくそつと障子が開くと、黒髪の少女が恐る恐る首を出した。そして音羽の姿を見た瞬間、安心したように表情を緩ませる。

「よかった！ 無事だったんだね」

突然のことで驚いたのだろう。音羽は目を丸くした。

「二人とも、いつまでそこに立ってるつもりだい？」

蒼雪の口調には棘がないように聞こえる。未だ戸惑いを隠せないようだが、再び背を押すと少女はおとなしく前へ進んだ。

亜矢はすぐに音羽の元へ駆け寄り、肩を抱いてやる。それから首をめぐらせ、自分と目を合わせてきた。

実のところ、どうして彼が音羽をここへ連れて来いと命を下したのかわからない。音羽を殺そうとしていたはずなのに。

ただ、もし大陸の者達がこの娘を襲ってきた時は、かならず自分の所へ連れてくるようにと言われたのだ。陰陽博士として命令されたからには、断ることなどできない。

しかし、自分は出来れば抱月に味方してやりたいと思っていた。

その心境を伝えると、彼は

「決してあの娘を殺したりはしないから」とだけ言った。

「蒼雪先生、どうするつもりですか」

「あのさ、俺がそんなに信じられない？ 大丈夫だからお前達は向
ここの部屋に行きなさい。まずはこの娘と二人きりで話したいん
だ」

蒼雪は音羽に、自分の前に座るようにと目で促す。

緊張の面持ちで彼の前に座る音羽を横目に、梓紗は亜矢と共に奥の
部屋へと下がった。

第十三話 暗雲

「なぜ俺がここにいるのかって、聞きたいんだろ？」

目の前の男が、こちらに向き直りつつ笑いかけてくる。

その作られたような彼の表情は、思わずぞつとするほど美しい。

「君は言葉を理解して話すことが出来るようになったからね。俺は本来手荒なことはしたくないと思ってる。なるべく穏便にことを進めたいんだよ。だから、少し話をさせてくれないかな」

「私を、殺そうとした人」

やつのことで声が出てくれた。

かつてないほどの緊張感と戦いながら、音羽は蒼雪を睨み付ける。

「初めはただの獣人だと思っただけからね。だけど君には、他の獣人とは違う何かを感じていた。そうしたら、思った通り大陸から指令があつてねえ。逃げ出したサンプルと完成品を捕まえてほしいって」

「サン、プル？」

聞きなれない響きの言葉に違和感を覚えた。

「俺も一応この都の人間だ。大陸の奴らはあまり好きじゃない。だから君をここへ連れてくるように言っただ。君だって、わけがわからないまま連れて行かれるのは困るだろ」

「私を、どこかに連れて行くの」

「だから、君は完成品なんだ」

何かを言わなくてはと考えているうちに、彼の言葉で頭の中が埋まっていく。

自分の気持ちを押しつぶされて消えていく代わりに、違和感はどうどん膨らんでいく。

ほとんど蒼雪と目を合わせることすら出来ず、うつむき涙が溢れそうになるのを必死にこらえている自分がいた。

「ごめんごめん、じゃあ君にもわかるように説明しようか。音羽ちゃん、君はこの都に来る以前の記憶があるかい？」

彼の口調が和らぎ、いくらか安堵感を覚える。同時に、緊張が少しずつ薄れていく。

この男は「今は」自分を殺そうとしていないようだ。少しは信用してもいいかも知れないと思った。

「私はお母さんと一緒にいました。ただお母さんは殺されて、抱月が来て」

「じゃあ、それよりもっと前の記憶は？」

その瞬間、開かない扉があることに気がついた。

自分の中にある記憶は、抱月に助けられる前後から始まっている。言葉を覚えてからの日々は鮮明だが、「お母さん」という存在と一緒にいた頃のこと浮かんでこない。

「俺は自分の立場を考えて行動しなきゃいけないからさ。だから、悪いけど君を大陸へ連れていくことになる。覚醒したばかりでまだ何もわからないだろうけど……君が完成したことで、千の一族が滅びるという未来が決まったんだ」

「一族が、滅びる？」

* * *

最後の一人に刀を突き刺し、その腹部から刀を引き抜く。間もなく刺した部分が凍りつき、敵は一声もあげずに絶命した。すでに体内へ浸透しているらしく、倒れた瞬間ごとりと鈍い音がした。

これが抱月の能力。刀で刺した部分から体内に侵入し、相手を内側から凍らせて殺すことができる。

刀を鞘に納めた直後、首筋に痛みが走る。

この頃妖の力を使っていなかったので、しばらく忘れていた。おそろおそろ右耳の下の辺りを押さえる。普段は使わないようにしている妖の力を使ったのは、そうしなければこちらが殺されかねない判断したからだ。

四つの死体を眺める。なぜ音羽一人に、四人も向かわせる必要があるのだろうか。

近付いて、一人の面を剥いだ。

その見開かれた瞳を見て、抱月は驚愕する。

すでに光を失ってはいるものの、その色は確かに新生種であるということを示していた。

慌ててもう一体を確認しようと顔を上げると、目の前に三つの彼岸花が咲いていた。

「獣人が、どうして……」

梓紗は確かに彼らのことを「隠密隊」と呼んでいた。陰陽組織の内部の者であることは間違いない。そしてその目的が音羽であったことも疑いようが無い。

しかし、彼らは間違いなく新生種だ。

「やっぱりお前か、抱月」

遠くから聞こえてきた声で我に返る。

「桜夜……」

「こんなところで何してんだ。お前、妖の力を使ったよな」

遠慮なく抱月の髪がつかまれ、桜夜の方に引き寄せられた。

覗き込んだ彼女の目には、きっと青い三日月の痣が映ったに違いない。

「抱月、痛みがいつもより酷いんじゃないか」

「何で」

「だってこれ、もう三日月じゃないぞ」

力が抜けたように手を放し、桜夜が珍しく不安げな顔をした。

「月が満ちようとしている」

抱月は幼い頃から、妖の力を使いこなすための訓練を受けていた。陰陽寮の幹部を親に持った子どもは、生まれたときから跡を継ぐという役目を与えられているからだ。

陰陽師として、新生種から都を守るのは大切なことだと教えられてきた。

妖の力を使った後、首筋に痛みを覚えるようになったのは、訓練が始まって一年も経たないうちだった。

“桜夜はおるか、兄の方より実力があるかもしれない”

——期待に答えようと必死だった。

「そついや、お前のその痣を発見したのもあたしだったな。もう十年以上前の事だけど。たしかにあの時は三日月だったのに」

どこか悔しそうな顔をして、桜夜が腕組みをする。

「最後に力を使ったのは半年前だ。その時はなんとも無かった。大丈夫だから、気にするな。それより、梓紗に音羽を預けているんだ。探しに行かないと」

「何！？あの不良が音羽ちゃんを。いくら非常時だからって、あんなのと一緒に行動させたら音羽ちゃんに悪影響が」

「待て、お前の方こそ傷はもういいのか」

案の定、目の色を変えて走り出そうとした桜夜の襟を、抱月は慌ててつかんだ。

「駄目だつたら、出てくるわけ無いだろ」

「それならいいけど」

手を放すと、桜夜は襟を正しながら嫌味っぽい口調で言う。

「しかし、抱月はよくも飽きずに人の心配ばかりできるよな。……」

そうか。痛さのあまり気絶するまで、痣のことを誰にも相談できないような内気な性格だからか」

「うるさいな。そんな大昔のことを」

「いいか、一人で何でもしようとするんじゃないぞ。あたしにも協力させてくれ」

「今回のことは——簡単には終わらないぞ」

「だろうな。まあ、お前とは腐れ縁だ。付き合ってやるよ」

得意気に笑う桜夜が、いつになく頼もしい存在に思えた。この自信に満ちた表情はどこから来るのだろうか。

抱月は振り返って四つの彼岸花を一瞥してから、それを背にして足早に歩き出した。

第十四話 遠い夜空

梓紗の気配を辿っていくと、たどり着いたのは自分の家の前だった。

戸を開けようと手をかけた瞬間、それは勝手に動いて中から亜矢が出てきた。

「抱月様、良かった！ 桜夜さんまで。ひとまず中へ。音羽ちゃんが待っています」

「なんだ、亜矢か。音羽と一緒にいてくれたのか」

「はい、梓紗の式神に呼ばれました。びっくりしましたが。私なんかでも、少しはお役に立てれば幸いですから」

玄関から廊下を挟んで正面の部屋。いつもどおり障子は開いていて、八畳ほどのその部屋の中には、茶色の髪の毛の少女が一人ぽつんと座っていた。

「音羽」

抱月の一声で、音羽が振り返る。

目が合って、しかしその顔に笑顔が浮かぶことは無かった。

「大丈夫だったか。梓紗は？」

中に入って彼女のそばへ寄る。

「梓紗は、他に敵がいなか見に行つたよ。すぐに戻ってくるって」
言い終わると、音羽はさつと視線を逸らした。

その不自然さに違和感を覚え、思わず抱月は桜夜と顔を合わせる。
彼女も不思議そうに眉根を寄せて首をかしげた。

しばらくの沈黙の後、気を使うように亜矢がそつと口を開く。

「それで……私が音羽ちゃんのそばにいるように頼まれたんです。
でも、お二人が来たなら大丈夫ですね。もうすぐ梓紗も戻ってくる
と思いますから」

「来てくれてありがとう。夜遅くなってしまつて悪かったな」

「いいえ、大丈夫です。ではこれで。勝手に家に上がり込んでしま

つてすみませんでした。音羽ちゃん、またね」

亜矢は抱月と桜夜が部屋に入るのを見届けると、軽く一礼をして去っていった。

音羽は閉められた戸をしばらく名残惜しそうに見ていた。

「な、なあ音羽ちゃん、どうしたの。元気がないみたいだけど」

思い切ったように、わざとらしく明るい声。桜夜が音羽の顔をのぞき込んだ。

「大丈夫だよ。桜夜ちゃんは、動いてもいいの？ 怪我は？」

「ああ。千香様が治してくれたし、もう大丈夫だ」

そう、良かった——紅い瞳は、どこか悲しそうに宙を見つめた。抱月は何か声をかけようとしたが、結局言葉が見つからなかった。敵に狙われたということで、怯えているのだろうか。

自分が殺されそうになったことを悟り、恐怖を感じているのかもしれない。

けれどそうではないような、「何か」が彼女の中にある気がした。彼女の瞳はただ窓の外を見つめるだけで、抱月には何も教えてくれなかった。

「あたしさ、今日はここに泊まっていくから。抱月、いいよな」

「ああ、調度蒼雪もないし」

音羽の体が強張ったのは、確かにその名前を抱月が口にした瞬間のことだった。

「あ……」

「馬鹿、お前なあ！！」

桜夜が物凄い形相で睨んでくる。

音羽を殺そうとしていた人物の名前だ。しっかり覚えていいるだろうし、迂闊に出さないようにしようと決めていたのに。

「いいの。蒼雪さんは、抱月のお兄さんだよ。だから、いいの。大丈夫だよ、心配しないで」

「でも、音羽」

「よし、それじゃ、もう寝ようか！ 音羽ちゃんも疲れたよね？」

これ以上気まづくなるのを阻止するかのようになり、桜夜は陽気に笑う。

音羽が頷いたのを確認すると、部屋の奥の押入れから布団を取り出し始めた。

そうしてあつという間に敷き終わると、抱月は廊下に追い出された。

「梓紗にあたしがいるって言うなよ」

一言断言し、ぴしゃりと戸を閉めた。

「そうか……仲悪いんだったな」

抱月は一人、戸に向かって返事をする。

首筋を掻きながら、そのまましばらく廊下に立っていた。

なぜ上手くいかないのだろう。音羽のあんな顔は見たくなかったのに。

ため息をつきながら、抱月は外へ出た。深い紺色の夜空が広がる。音羽の名前を決めた夜も、こうして一人空を見ていたことを思い出す。

「ただいまあ。無事だったかい」

間もなく梓紗が姿を見せた。

煙管をふかしながら、のんびりと抱月のところへやって来る。

「怪我とかは無さそうだね。さすが」

「大分苦戦はしたよ。……梓紗、お前隠密隊のこと何か」

「いや。俺はわからんね。屋台で何か買おうと思ってふらふらしてたら、殺氣がしたんよ。それで何事かと思って見たら、抱月達が狙われてるのに気がついたから」

ふわりと煙が舞い、梓紗が空を仰ぎながら言う。

「でもま、今日はもう何も起こらないと思う」

「明日、陰陽寮へ行ってくる。兄にも事情を話してみるつもりだ」

「うーんと、俺はさ、出来れば、抱月の味方にいるつもりだから。」

何かあれば言ってくれ」

視線こそ合わせようとはしてこないが、その口調ははっきりしている。

「抱月は俺の友達だからさ。兄ちゃんみたいなもんだしな」

そして梓紗は笑った。夜の闇が彼の表情を鮮明にはさせなかったが、白い煙に巻かれているその姿はなんだか頼りなく見えた。

「じゃあ帰るよ。何かわかったら報告するから」

「なあ、梓紗。俺は何か間違ったことをしているんだろうか」

すると彼はきょとんとして、しかしすぐにまた笑いながら、

「いいんじゃない。俺は今、自分が思ったとおりのことをしている。自分の信じたことをしている。だからさ、抱月も自分が思ったとおりにやればいいんじゃないの？」

軽く手を振って、梓紗は夜の中へ消えていく。

彼の姿が見えなくなつて、抱月はまた空を見た。

複雑な心境でいるせい、いつもよりも空が遠く、暗く見える。

また明日になれば、新しい問題が次から次へと起こるかもしれない。

もしかしたら、自分は間違ったことをしているから問題が起こるのだろうか。

一つの存在を、音羽という存在を、守ろうとしている。

だが、今日自分の手で殺めた者達は、音羽と同じ種族だった。

だけどそれは、音羽を守るためだった。

ひたすら堂々巡りを繰り返す頭の中。

深い霧の中を手探りしているようで、答えが見つからなくて苦しくなる。

でも今は前に進むしかない。

二つの種族を共存に導きたいを思う気持ちを、自分の思ったこの道を進んでいくしかない。

その結果、例え陰陽寮という大きな存在を敵に回すことになろうとも、きつと後悔はしないだろう。

第十五話 闇を想う

朱色の衣を着た男が、疑わしげにこちらをじつと窺っている。

「蒼雪、貴様どういうつもりだ」

「お待ちくださいらいこう葉孔様。私の考えを聴いていただけないでしょうか」

刺すような視線を感じた。

進んで目を合わせたくは無い相手だが、畳に近づけていた頭を上げて真正面から見据えた。

葉孔は不機嫌そうな顔でじろりと抱月を睨んだが、やれやれとため息をつくと軽く頷いた。

「言ってみろ」

「それでは申し上げます。今あの少女を抱月から引き離すのは、極めて危険です」

「何が危険だというのだ」

「抱月の持つ妖の力です。ご存知だとは思いますが、あなたが放った四名の刺客たちは、すでに全員殺されました。しかも抱月と戦わせたことによって、その正体を見破られた可能性があります」

「それがどうした。見破ったところで何が出来る」

「あれは私の弟です。そして私ですら、ともに戦えば負ける可能性があります」

「ではなぜそれほど力を持ちながら、何の役職にも就いていないのだ。貴様が陰陽博士になったのは何時だ？ 二十歳の時ではなかったのか？」

葉孔の顔がさらに曇る。

確かに頭は良いが、こいつは元来それほど気が長い性分の男ではない。

怒らせれば蒼雪でさえも殺されるだろう。この男ならば、おそらく何のためらいもなく。

自分よりも一回り歳上のくせに、未だ“丸くなる”ということを知らないようだ。

ここで失敗するわけにはいかない。蒼雪はにこやかに笑って見せた。「あれには力を使えない理由があるのです。幼い頃より、妖の力を使うと体に負担がかかり、酷い時には気を失うことも」

「負担だと……？ 能力と体の不一致とでもいうのか。しかしそのような例は聞いたことがないぞ」

「原因はわかりません。ですが発覚以来、本人はできるだけ力を使わないように気をつけています。新生種を退治する際も、負担がからない程度に発動するのみ。今回は、少女を守るためにやむを得ず使ったようですが」

ここでようやく蒼雪の話の意図を読み取ってくれたらしく、葉孔の表情が少しだけ緩んだ。しかしまだ安心は出来ない。

「ですから、公的な命令を下すのが良いかと。あれも陰陽寮からの命では逆らうことは出来ないでしょう。少女は殺さないと念を押せば大丈夫です。私から直接、少女を引き渡すようにと」

「いや、良い考えがある。貴様とて勝てるか分からん相手なのだろう？ しかも自分の身を省みず戦って、我々の刺客を殺してしまつた。ならば我々の方へ付かせてしまえば良い」

今や機嫌を直しつつあるようで、さらに余裕まで生まれたらしい。「名案だろう。俺ももう一人、部下がほしいと思っていたところだ」彼がにやりと笑うと、胸の中に憎悪が走った。

「どうした？ そうか、さすがの貴様もそれは嫌か。自分の手は染めても、弟の手は血に染めたくないのだな」

今すぐにでもその喉を引き裂き、二度と口を利けなくしてやりたい。もしも、自分が何者にも縛られていないのならば。

「分かるぞ、貴様の葛藤が。俺を殺したいほど憎んでいるのだろうな」

「私はそのような顔を、いつもあなた様に向けておりますか」先ほどから表情は全く変えていないつもりだ。

それなのに、なぜこいつには自分の心の中がわかるのだろう。

「いいや、完璧だ。何の曇りもなく良く出来た表情だ。^{かお}。しかしな、何がそうさせるのは知らんが、俺はいつも薄気味が悪くて仕方ないのだよ。貴様はいつか俺を蹴落とすだろうな。そんな気がする」

しばらくの沈黙が訪れた。

蒼雪は一瞬、頭の中が真っ白になった。そして改めて菜孔をよく見直した。

今初めてこの男に対して恐怖を抱き、それと同時に感心してしまった。

菜孔は大陸では名の知れた武人である。

そのしっかりした体つきは、彼の強さをそのまま現しているかのようだ。

さらに頭も良いが、欠点は気が短いこと。だと思っていた。

しかし二十四歳で大陸の陰陽隠密隊の頂点に立ち、三十歳の時には日本との通信役をすべて任せられたらしい。

そして今は大陸の代表者として派遣され、重大な任務を抱えている。

つまりは、それだけ実力も地位もある男なのだ。

気を短くし、いつでも闘争心をむき出しにしていなければ、ここまです世するのは不可能。

誰かを抹殺したり、他人を蹴落としたりの生活をしているのなら、性格が丸くてはともやっていけない。

だから、この男は“こういう性格でいる”のだろう。

蒼雪は身震いし、さらに慎重に言葉を選んだ。

「どうか……私にお任せください。大陸の船が出るまでには、必ずあの少女を連れてまいります。明後日まで、どうか手を出さないでいただけませんか。私はあなたの命に背くことはいたしません」

「そうか。貴様も役職にこだわっているようだからな。私事をはさむほど馬鹿ではないだろう。好きにするが良い」

菜孔は笑う。すべてをあざけるような表情で。

蒼雪は一礼すると逃げるようにして部屋を出たが、しばらくその表

情が頭に焼き付いて離れなかった。

そうやって相手の心を探っているのだろうか。

彼の態度に殺意や憎しみを持ち、彼の敵となった者はおそらくもう生きていないのだろう。

あくまで想像にすぎないが、ただ漠然とそんな気がしてならなかった。

では、任務として言い渡され、義務的にあの男の部下となった自分とは一体どうすべきか。

守ろうとしているすべてを、あの男に壊されてしまいそうで、しかしこの立場にいる限り、務めを果たさなくてはならない。

自分の代わりになれる者はいない。そう、誰にもこんな思いをさせるわけにはいかないのだ。

陰陽寮を出て、一人夜道を歩き出した。

何もかもが急速に進展している。

あの少女がここへやってきたことで、すべてが変化しようとしている。

蒼雪は明るい月を見上げた。いつもと何も変わらない月を。

負けるわけにはいかない。そして服従するつもりもない——あの男だけには。

憎しみの心だけが、静かに膨らんでいくのがわかった。

第十六話 待ち人

いつになく柔らかで明るい日差しの下を、抱月は足早に陰陽寮へと向かっていった。

昨晚自分が隠密隊に襲撃されたことを、兄に言わなくてはならない。もともと、その兄が自分を狙って、という可能性もあるのだが。

いずれにせよ、「都の住人が大陸の者に襲われた」という事実は、今後双方の仲を狂わせることになるかもしれないのだ。

上部の人間を捕まえて、何らかの情報を聞き出さなくてはならない。間もなく陰陽寮の赤い門が見えてくる。

するとその向こうに、いつもよりも大分薄手の着物を纏った人物を発見する。

「千香様。こんなに早くからどこへ行くんですか」

かなり近付いても、彼女はうつむいたまま抱月に気がつかなかった。

「あら、抱月」

朝の光をきらきらと纏った瞳が、驚いたように抱月を見上げた。

「ごめんなさい。ちよつと考え込んでしまつて」

「もしや兄の事ですか？」

兄と千香はまだ正式に夫婦となつたわけではない。

しかし、物心ついた時から千香はずつと抱月の「姉」であつた。

色々なことを相談したし、特に幼い頃桜夜とケンカをした時は、必ず千香のところへ助けを求めにいったものだ。

その分、最近は何か千香の役に立てないだろうかと、彼女の悩みを少しでも聞こうと考えている。

「あの人ね……何だか、ここ数日様子がおかしいの」

「俺も調度、蒼雪と話をするために会いに来たところだつたんです」
彼女は蒼雪を愛し、慕っている。

しかし、彼の仕事に対するすさまじい執着心に対して、不安を感じ

心配している様子だった。

「昨日、夕方会ったのだけど、なんだか思いつめたような感じでね」
いつの頃からだろうか。

蒼雪が自分の役職と立場を常に気にし始め、いつも緊張したような感情を押し殺したような顔をするようになった。

会話をしても、どこか当たり障りのないことしか言わなくなった。

「抱月、あなたは何か聞いていない？」

「いえ、俺には……」

陰陽寮には、この都の行政を取り仕切る七人の役人がいる。

その頂点に立っているのが陰陽頭である。

彼女の父は七人の役職の中でも、次の陰陽頭おんみょうがしらと影でささやかれている人物だ。

陰陽博士の蒼雪と、時期陰陽頭の娘千香。

誰もがうらやむような、これ以上ない組み合わせだった。

始めは、それゆえ役人達の期待にこたえようと必死になっているのかと思われた。

だが、彼は昔から誰かに媚を売ることが大嫌いだったはずだ。

昔のままならば、何も変わっていなければ——時がたつに連れて兄との距離は大きくなるばかりで、今となっては聞き出す余地もなくなってしまった。

「とにかく会ってきます。蒼雪はどこに」

「それが昨日夜中に陰陽寮を出て行っただけ、帰ってこないのよ。大陸の方と話があったみたいで、終わったらまた来るって言ってくれたのに」

そこで思わずはっとした。

彼女が着ているのは薄手の着物だと思っていたのだが、良く見れば上に羽織っている一枚だけが着物で、その下は白い寝巻きであったのだ。

「その格好……まさか、一晩中ここで蒼雪を待ってたんじゃない」

思わずその存在を確認するかのように、千香の両肩を掴んだ。

すると彼女はくすりと笑って、

「いいえ。さすがに、そんなにずっとは待ってないわ。ついさつき、起きてきたところよ」

「姉上、中で待ちましよう。日差しは明るいけど、今日は少し肌寒い。風邪を引きます」

「大丈夫よ。今出てきたばかりなんだから」

しばらくじっと、お互い隙を見せずに視線を合わせ続けた。

しかし抱月は耐え切れずに、やれやれとため息をついた。

「わかりましたよ、待てばいいのでしょう。じゃあ、俺も一緒に待ちます」

無言の争いを制したのは、千香であつた。

その美しい瞳は、何者にも負けない力を秘めていて、見るものを圧倒し屈服させてしまうのだ。

にらめっこで「姉上」に勝てることは、多分この先ずっとないのだろう。

「あら、頼もしいこと。でも、もう本当に大丈夫みたいね。ほら、帰ってきましたよ」

振り返ると、抱月が今来た道を蒼雪が歩いてくる。片手には弓を携え、矢の入った布袋を背負っている。

その表情は、特に普段と変わらない様子だ。

「何、二人とも。そんなところで」

至って明るく、軽やかな調子で蒼雪が話しかけてきた。

「千香、悪かったね。ちよつと都を出ていた。どうも獣人が数体、都を狙ってうろついていたみたいでさ。夜中に急に狩りに出る事になったんだ」

するりと割り込んで抱月から千香の隣を奪うと、彼は優しく千香の肩に手を置いた。

「そうだったの。怪我は無かった？」

「大丈夫。出来の悪い弟と違って、俺は仕留め損ねたりしないさ」

「もしもし、兄上様？」

すっかり二人の世界を作り上げてしまった蒼雪に思わず苛立ち、

抱月はわざと丁寧な口調で呼びかけた。

「……まだいたの。なんだい、その疲れ果てた顔は。美しくないよ」
「その優しさを、たった一人の弟にはむけてくれないのですね、兄上様」

「やだなあ、俺はいつだって優しいじゃないか。ね、千香」

「からかつては駄目よ。抱月、あなたにお話があるって」

すると蒼雪は意外そうな顔をして、抱月の顔を珍しそうに眺めた。まるで不思議な物体であるとも言わんばかりの、初めて見たものに興味津々な幼子の表情である。

「ふーん。なるほどね、弟もちよつとは頭が働くようになったようだ。では少し話を聴いてやろうか。来なさい抱月」

彼の後について陰陽寮の中へと入っていく。

いつ以来だろうか。久しぶりに兄と言葉を交わした。

誰の邪魔も入らず、蒼雪と千香と抱月の三人だけでいたからこそなのだろう。

当たり前だった会話が、こんなにも懐かしい。

この後兄から告げられる真実を耳にするまでの、束の間のやりとりではあったが、抱月の心には昔と変わらない温かい気持ちに蘇りつつあった。

第十七話 別つとき

案内されたのは、以前音羽のことで兄と対峙し、刀を向けたあの部屋だった。

ここは蒼雪の仕事部屋で、いわゆる陰陽博士が生徒に勉強を教える部屋だ。

以前は何もなかったが、今は部屋の隅に縦長の机が一つと、そばに座布団が二つ積んである。

梓紗と亜矢はいつもここで授業を受けているのだろう。

足音がして、弓と矢を片付けに行っていた蒼雪が戻ってくる。

彼がそばまで来ると、千香が思い切ったように口を開いた。

「蒼雪、私も一緒に……」

「ごめん、二人で話したいんだ」

千香は部屋の入り口で立ったまま、目も合わせず通り過ぎて行く蒼雪をじっと見つめた。

何か言おうと口を開いたが、その後あきらめたような顔をして、小さくため息をついた。

千香の視線が、蒼雪の顔から足元の畳へゆつくりと移る。

「じゃあ、私は部屋に戻ります。抱月、桜夜ちゃんと音羽ちゃんを連れて、また遊びにいらっしやいね」

それでも、彼女は顔をあげて微笑んだ。

どこか無理をしているように見えるのは、気のせいではないだろう。

抱月は千香に会釈をして、黙って障子が閉められるのを見ていた。その心の内に、彼女はどれほどの孤独を抱えているのだろうか。

「そんなのさあ、気にしてる暇なんかないよ。わかってるよね」

まるで抱月の心を読み取ったように、蒼雪は突き刺すような口調でそういった。

彼の方に向き直ると、先ほどとは雰囲気が変わっていた。

「まあ座りなよ」

蒼雪は座布団を持ち、部屋の真ん中辺りに敷くと、こちらを見てにっこりと笑う。

やけに機嫌が良いようにも見えるが、そう振舞っているだけかもしれない。

抱月は言われるままに、蒼雪と向かいあつて腰を下ろした。

そしてまるで兄の真似をするように、刀を鞘ごと抜いて自分の隣に置いた。

こうして話すのは、本当に久しぶりである。

「それで、俺に何か言いたいことがあるんだろ？」

「昨日、隠密隊に襲われた。しかし、奴らは全員獣人だった。そして狙いは音羽……。なぜ害がない音羽を狙う？ あの子はもう俺達を攻撃したりしない。知ってるだろ。それにお前だって、今はもう音羽を殺そうとしていない。それはあの子が他の獣人と違うからだって」

「はあ……そんなに一度に沢山話されたって、わけがわからないよ。少しは落ち着いたらどうだい」

面倒だ、とでも言いたげに、蒼雪は肩をすくめた。

「蒼雪、何か知ってるんだろ。教えてくれ、なぜ音羽が狙われるんだ。あれは中国側の判断なのか？ だとしたら、俺はこれからどうすれば良い。四人とも殺してしまった」

目の前の兄は、一体何を考えているのだろうか。

抱月は、蒼雪が困ったような顔で腕組みをしながらうつむくのをじっと見守った。

やがて、しっかりと抱月を見据えながら彼が問いかけてきた。

「じゃあ訊くけどね。なぜ俺達は新生種を狩らなくてはならないと思う」

「なんだよそれ。まず俺の質問に対して」

「いいから、言ってごらん」

「それは……“人としての理性を持っていない新生種をそのままにしておけば、我々の存在が脅かされる”からだろ」

「さすが抱月、よく出来ました。じゃあ、新生種がなぜ存在するのか、どこから来るのか考えたことはあるかい」

それは、今までのものとはどこか似ているようで似ていない問いかけだった。

新生種は突然変異によって誕生し、都を襲ってくるようになった危険因子。

自分達はそれを敵と見なし、当たり前のように戦ってきた。

何百年も前から、そしてきつとこれから何百年先も。

彼らは自分達を襲ってくるゆえに「魔物」として扱われ、どこにも存在している。

どこから来るのか、なぜこの世に存在しているのか——そんな無意味なことを考えて暮らしている者はいないだろう。

それは、”なぜ自分が生きているのか？”と問われるのに等しい。

「昨日お前を襲った奴らは、確かに新生種だったんだろ？　じゃあなぜ中国側の刺客となつて動いている？　理性を持たないはずの新生種が、音羽ちゃんを狙つて行動できるのはなぜだ」

「術か何かを使ったのかも知れない……いや、あれはそんな風には見えなかった。操られているような戦い方ではなかったんだ。誰かにきちんと訓練されてから、自分で考えながら戦っているような、そんな動き方だった」

「へえ、なるほど。良く相手を観察できてるね。ははは、ますますわからなくなってきたんじゃない？　どうして、新生種のくせに意思をもつて動けるんだらうねえ」

蒼雪は少し間を置いて、

「最後に良いこと教えてあげるよ。音羽ちゃんは新生種だ。だが話すことも出来たし、考えることもできる。なぜなら彼女は、完成品だから」

「完成、品？　どういうことだ」

「残念だが、これ以上は教えられない。俺は今、兄としてたった一人の弟に話をしたただけだ。いいかい、あとはお前自身で考えるんだ。

ヒントは充分与えたよ」

「何を言ってるんだ？ 意味がわからない」

「だろうね。でも俺もこれ以上言うわけにはいかないんだ。まあ、せいぜい頑張ることだ」

蒼雪は刀を取り、すつと立ち上がった。

そして腰に差すまでの一連の動作を、抱月は呆氣にとられたまま目で追った。

ああ、兄がやると何でも優雅で上品に見える。

幼い頃から、何度その手つきや仕草を真似しただろう。

（兄様、覚えていますか？ あの頃の日々を）

“どうしたら、兄様みたいにカッコ良くなれるの？”

その度に蒼雪は、笑いながら答えてくれた。

“抱月は抱月らしく成長していけばいいんだよ。誰かの真似なんてする必要ないんだ。自分で考えて行動しなさい。そしてお前が正しいと思う道を選びなさい”

（両親を亡くしてから、二人で懸命に戦ってきたあの日々を。あなたはいつも、あらゆるものから俺を守ってくれた）

蒼雪は静かに歩き出す。

その背中を見てはつとして、慌てて抱月は彼を呼び止めた。

「待てよ、何をする気だ？ 一体何を知ってるんだ」

慌てて立ち上がり、彼の腕を掴もうと手をのばす。

「それ以上近づくな」

やけに重苦しい口調だった。

まるで、全てのことに関わるなど言われたような気がして。

抱月がのばしたその手は、宙に浮いたままで終わった。

蒼雪が腰の刀に手をかけている。

「どうして何も言ってくれない。どうして一人で行くとする。俺達兄弟だろ。なぜ俺には何も教えてくれないんだ。俺だって兄さんの力になりたい」

「悪いけど、お前にこれ以上付き合うほど俺は暇じゃないんだ。そ

れに、お前だつて自分のやるべきことがあるんじゃないのか」

彼は一度も振り向くことなく部屋を去っていった。

障子が閉まった瞬間、なぜかもう彼の顔を二度と見ることが出来ないのではという予感に囚われた。

だが、立ち止まるわけにはいかない。

たとえば兄とは正反対の道を進むことになったとしても。

第十八話 前夜へ

大陸からの使者達が、帰り支度を始めていた。ようやく明日は、大陸の船が帰るところである。

「今年はバタバタしたなあ……ちよっと、疲れた」
「そうだな、色々ありすぎて」

陰陽寮の中で使者達が慌ただしく動き回る様子を、二人は中庭から遠巻きにうかがう。

差し込む夕日を受け、桜夜は眩しそうに目を細めた。
もしかすると、先日音羽を狙った者がこの中にいるかもしれない。

「あたしは、絶対出て来るわけがないと思うけどな。皆忙しそうに支度してるんだし、暗殺だの何だのってこんな場所で話してる馬鹿がいるわけない」

「わからないだろ。桜夜は大陸語得意なんだし、頼むよ」

「てか、抱月こそ散々勉強してたじゃん」

「あんなに早口で話したら、全然わからないよ。お前は小さい頃、時々母さんと大陸語で話してたんだろ？」

「んー、まあね」

桜夜の母親は、大陸人だった。彼女の父が使者として向こうへ派遣された際に知り合ったそうだ。桜夜は両親を獣人に殺されてからというもの、あまり二人との思い出を話したくないようだった。

「それより、音羽ちゃんは大丈夫なのか」

「梓紗に頼ん……亜矢が、一緒だから」

「亜矢ちゃんが、一緒なんだな」

冷たい視線を感じたので、抱月は無意識に声が小さくなった。

「でも、いい加減に仲直りすれば」

「あいつとは仲たがいするように出来てるんだよ。それが宿命って奴だ。きつとお互いそういう星の元に生まれたんだよ」

桜夜がやけに真面目に話すので、抱月は思わず吹き出してしま

った。

「なんだっけ、習字の時間に梓紗がふざけて筆を振り回したんだよな」

「……知らない」

「それで、お前の顔に墨が飛んだと。あれは凄いケンカだった」

「生意気なんだよあいつ。年下のくせに」

桜夜は文字通り、口をへの字にした。

「もういいや、お前は音羽ちゃんのところへ行けよ。何かあれば式神を走らせる」

「悪いな、頼むよ」

明日の朝には、彼らは帰って行く——果たしてそう上手くいくだろうか。

何か仕掛けてくるとすれば、今夜だ。

歩きながら、抱月は独り考えた。

もし、大勢で来られたら逃げ場がない。都の中にいる限り、何が起きてても不思議ではないのだ。

敵に動きは全く見られないが、音羽が狙われているのに違いはない。

ならば思い切って、都から出てみようか。

そうして色々考えながら歩いている、まさにその時だった。

遠くから、亜矢が駆け寄って来る。かなり焦っている様子だ。目が合った途端、泣き出しそうな声で何度も抱月は名前を呼ばれた。

「亜矢、どうしたんだ」

「私が悪いんです……音羽ちゃんから離れなければ」

酷く息切れをしながら、彼女はひたすら頭を下げた。

「落ち着いて。何があつたんだ」

「音羽ちゃんが……いないんです」

それを聞いた瞬間、血の気が引いた。痛いくらいに、体中に緊張が走る。

「最後に見たのは？」

「ずっと一緒にいました。なのに、私がお茶の用意をしようと席を外して……ほんの一瞬目を離れたから」

抱月の両腕を必死に掴み、半ば叫ぶような声で言うのは、どうにか事の重大さを知ってほしいからなのだろう。

「でも、遠くへは行けないはずだ。捜せばすぐに見つかる」

「違う！ 違うんです！ それじゃ駄目なんです。遠くへ……行ってしまう」

ついに亜矢は両手で顔を覆うと、その場に泣き崩れた。

「ごめんなさい……私は知ってたんです。先生が、彼女に何を言ったのか」

「先生って、蒼雪の事？」

抱月もその場に膝を付き、出来るだけ亜矢と視線を合わせようとした。

彼女は一度頷き涙を拭う。そして顔を上げると、意を決したように話し出す。

「音羽ちゃんが隠密隊に襲われた日……梓紗は先生の命に従い、音羽ちゃんを連れて来ました。先生と、あなたの家に」

一瞬、抱月の思考が停止する。

「ちよつと待ってくれ、どういう事なんだ」

「私と……梓紗は、先生の弟子です。陰陽寮の支配下にいる限り、私達は敵が来るなどの非常事態が起きた場合、先生の命に従い行動しなくてはなりません。その事は、あなたもご存知のはず」

ましてや陰陽博士ともなれば、一般の陰陽師達にも独断で命令が出来る。

抱月も、先代の陰陽博士から腐るほど聞かされた。しかし抱月が見習いだった間に、その命が下される事はなかった。

「そうか……じゃあ、梓紗も」

「だけど彼はあなたを慕っています。わかってあげて下さい。彼は今、凄く苦しんでいる。自分の進むべき道を選ばなくてはならないから」

動揺、そして焦燥感。これを、裏切りと呼ぶには度が過ぎるのだろう。けど何かが、大きく崩れたような気がして。確かな信頼が、静かに目の前で崩れていくようで。

「あの晩、あなたが帰って来る前に先生が待機していました。そして音羽ちゃんと話しをしたんです。ほんの数分ですが」

「二人だけで？」

「私達は、襖ごしに聞いていました。音羽ちゃんは……」

亜矢は悲しそうな顔を見ると、俯いて黙ってしまった。

「音羽に何を言ったんだ!？」

もどかしくなり、亜矢の両肩を掴んで揺する。

「痛っ」

その声にはつとして、手を離れた。怒りの矛先を向ける相手を間違えている。

「ごめん……」

「いいえ。私がつと早く伝えていれば良かったんです」

「君が悪いわけじゃない。これは仕方ない事だよ。君には君の立場がある。それに対してどう行動するのは、君の自由だ」

亜矢は頷き、落ち着きを取り戻した様子で言った。

「まず、事情をお話します。一旦抱月様の家に戻しましょう。明日の朝までは大丈夫なはずですから」

（やはり、動くのは明日か。何をするつもりだ、蒼雪……）

不安な気持ちを亜矢に悟られぬよう、抱月は表情を穏やかな風に装う。

「梓紗は今、単独で音羽ちゃんを捜していますが、先に抱月様と私が接触出来たので呼び戻します」

彼女は懐から白い折り紙を取り出す。見習いの陰陽師がよく使う、飛ばしやすい型のものだ。

亜矢は妖しの力を込め、空に向かって放つ。

蝶々の形をしたそれは、淡く桃色に光りながら飛んでいった。

「前に見た時より、大分上手くなったな」

「いいえ、まだ蝶の型ですから。梓紗より妖力も弱いし——さあ、戻りましょう」

亜矢はしっかりした口調で言いながら歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664a/>

現し世の華

2010年10月21日13時25分発行